

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」
平成25年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	熊本県	番号	4 3
-------	-----	----	-----

推進地区名	推進校名	児童生徒数
合志市	合志市立西合志南小学校	7 0 1
八代市	八代市立郡築小学校	2 1 6
あさぎり町	あさぎり町立あさぎり中学校	4 7 6

○ 調査研究の内容

1. 推進地域における取組

本県における重点課題である、基礎的・基本的な知識・技能の習得とこれらを活用して課題解決に必要な思考力、判断力、表現力等の育成及び主体的に学習に取り組む態度を養う教育の推進については、本県、義務教育課の取組の指針である「義務教育課取組の方向」に位置付け、各学校で推進を図ってきた。

基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得とこれらを活用して課題解決に必要な思考力、判断力、表現力等の育成及び主体的に学習に取り組む態度を養う教育の推進

- ・小学校低学年から基礎学力を確実に身に付けさせ、繰り返し指導の充実を図るとともに、小、中の連携のもと「徹底指導」と「能動型学習」とのめりはりをつけた熊本型授業の質を高める計画的、組織的な取組を推進する。
- ・県学力調査（ゆうチャレンジ）の問題や調査結果等を活用し、教材の開発や学習活動の一層の充実を図る。
- ・教科等の目標の実現に向けた言語活動を適切に位置付けるとともに、学習意欲を高める授業の構成や展開の工夫改善を図る。
- ・適切な学習評価のもと、個に応じた学習活動の一層の充実を図るなど、指導と評価の一体化を推進する。
- ・学校図書館の整備・充実に努め、その活用による主体的な学習活動や読書活動の一層の充実を図る。

これらのことを踏まえ、本事業においては、各推進地区や推進校における研究主題をもとに、児童生徒の実態を踏まえた「確かな学力」の育成のために、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得とこれらを活用して課題解決に必要な

な思考力、判断力、表現力等の育成及び主体的に学習に取り組む態度を養うための実践研究を推進した。

また、学校関係者はもとより、有識者等から広く意見を聴取し、今後の学力向上対策について検討する学力向上対策検討委員会を開催した。協議題を「学校、家庭、地域、市町村教育委員会が一体となった学力向上を図るためには、どのような手立てを行えばよいか」とし、全国学力・学習状況調査の結果分析や研究推進校の取組をもとに協議を行った。協議された意見については、今後の学力向上対策の参考とした。

更に、各学校の教務主任及び研究主任等のミドルリーダーを対象として、学力向上に向けた組織的な取組や、教師の意識改革と指導方法の工夫改善等に関する研修を管内ごとに実施した。

推進地区及び推進校に対しては、本事業における研究内容及び推進体制の充実を図るため、義務教育指導主事を派遣し、指導・助言を行った。

2. 推進地区における取組

(1) 合志市

① 合志版コミュニティ・スクールの推進

- ・ 家庭・地域との連携を図った基礎学力向上システムを構築するために、「合志版コミュニティ・スクール」を推進した。

② 市学力向上研究校の指定

- ・ 合志市立の全小・中学校に「市学力向上研究指定」を行い2カ年の研究に取り組んでいる。研究指定校は、全て研究紀要を作成し、研究会当日は全体会での研究概要説明、公開授業、分科会を行い研究を深めた。

③ ICT教育の推進

- ・ ICT教育担当者会を組織して、特別支援学級を主とした、タブレット端末の購入を協議した。研究推進校の西合志南小学校はICT教育推進モデル校に指定して機器等の購入を優先して進めた。

④ 「ことば教育」の推進

- ・ 適切な言語環境の整備と、話す・聞く・伝えるといった表現力の育成を図るため、学校生活の一日を通して豊かな言語環境を意識した実践を行うとともに、専任の外部指導者として、各小中学校が計画的に活用した。

⑤ 英語活動の推進

- ・ 小学校への外国語活動の導入にあわせ、小学校5年～中学校3年を対象に「英語チャレンジ大会」を開催し、ALTや英語指導講師の協力・指導を受けながら英会話力を高めた。

(2) 八代市

- ① 小学校国語における「話す・聞く能力」、「読む能力」の育成
 - ・ 小学校国語科の授業において、言語活動を有効的に位置付けた思考力・判断力・表現力等をもつ高める授業スタイルの確立を行った。また、読書につながる指導や授業展開の推進、図書館の整備を行った。
- ② 教師の意識改革と授業力向上
 - ・ 熊本型授業の推進を行い、教師の意識改革と授業力向上を進めた。また、学力向上ハンドブックの活用による教師の授業力向上を目指した。
- ③ 基盤となる学びの環境づくり
 - ・ 各校における学習規律の整備や小中一貫・連携教育を推進するため、小中連携コーディネーター研修会等の開催、各中学校区の取組の情報提供を行った。
- ④ 個に応じた指導、補充学習に対する学校の指導体制づくり
 - ・ 算数科での少人数指導やT T指導において、効果的な授業展開や指導方法について研究を進めた。
- ⑤ 家庭で学ぶ環境づくり
 - ・ 各校区で、「家庭学習の手引き」や「生活のきまり」を作成し、家庭学習の意識を高めるとともに、家庭の教育力や家庭学習への意識を高めるための講演会等を行った。

(3) あさぎり町

- ① 基礎・基本の徹底と思考力・判断力・表現力等をもつ高める授業の工夫改善
 - ・ 町内校長会議にて、全国学力・学習状況調査や熊本県学力調査結果を児童生徒質問紙回答状況とも合わせて分析し、各学校の課題と対策に向けて指導を行った。
 - ・ 各学校の取組の成果と課題について、町内全教職員及び地域住民等に参加いただき、あさぎり町学校教育研究会実践発表会を開催した。
- ② 「分かる授業」の推進
 - ・ 特別支援教育支援員、特別支援教育教員補助員を小中学校に配置し、特別支援教育の視点に立った学習の充実を目指し取り組んだ。
- ③ 学びの連続性を重視した小中連携
 - ・ 小中学校それぞれの教職員による教科部会を設置し、小中合同の授業研究会を実施した。A E E 部会（Asagiri Enjoy English の略、部会員：小学校外国語活動担当者、中学校英語担当者、A L T）では、英語読本「Asagiri welcome to our town」を作成し、全中学生と各小学校に配布した。
 - ・ 幼・保、小、中連携カリキュラムを作成し、育てたい子どもの姿を成長段階ごとに見直し、つながりを意識した取組を行った。

- ④ 学校応援団の組織の整備と推進による豊かで効果的な学習活動の工夫
 - ・ 全学校で学校応援団を組織し、地域と一体となった学校づくりに取り組んだ。
 - ・ 町内のそれぞれの学校応援団が連携・協力をしながら、活動を推進していけるように、あさぎり町学校応援団連絡協議会を設置した。

3. 推進校における取組

(1) 合志市立西合志南小学校

- ① 読む力の土台となる基礎・基本の確実な習得に向けた取組
 - ・ 読む力をつけるために、基盤となる児童の言語環境を整える必要があり、さまざまな日常活動、家庭学習等の取組を行った。
 - 〈朝自習を活用した日常指導〉
 - ア 学力充実タイムの取組
 - イ かがやきタイムの取組
 - ウ 読書タイムの取組
 - 〈個別指導の時間の利用〉
 - 〈家庭学習の指導〉
 - ア 全学年共通の「学習の手引き」の作成
 - イ 読解力向上を目指した宿題の工夫
 - ウ 家庭との連携
 - 〈言語環境の整備〉
 - 正しい姿勢・発表の仕方・聴き方や声のものさしを掲示
- ② 習得したことを活用するための言語活動を充実させた授業展開の工夫
 - 〈授業改善のポイント〉
 - ア 身に付けさせたい力の明確化
 - 学年、単元で身に付けさせたい力が何かをはっきりとさせ、指導の重点化を図った。
 - イ 習得の授業づくりの工夫
 - 習得の1時間の授業を4つの段階に分け、考える段階では課題解決に向けて児童が見通しをもてるように、教材文への書き込み、学習プリントの工夫、板書、発問の工夫、視覚的な効果等も活用した。
 - ウ 単元を貫く言語活動と習得の時間を関連付けるための構成の工夫
 - 身に付けさせたい力に対して単元を貫く言語活動が適したものか吟味しながら単元の指導計画を立てた。

(2) 八代市立郡築小学校

- ① 授業改善の取組
 - ア 授業スタイルの確立
 - ・ 児童が学習意欲や自分の考えをもち、表現する力を育成するための

学習過程の工夫として、熊本型授業を基盤とした教師用の本校型授業スタイルを作成した。

イ 手引きの作成と活用

- ・ 本校の授業スタイルを推進する上で必要な「発問」「机間指導」「ノート指導」「板書」「学び合い」の項目等の共通実践事項を教師用の手引きとしてまとめた。

ウ 少人数指導による個に応じた指導

- ・ 3年生以上で習熟度別の少人数指導を実施しており、児童の理解の状況に応じて、コースごとに課題や発問・教具などの工夫を行った。

エ 授業改善を目指した校内研修の取組

- ・ 本校では、校内研修をPDCAサイクルで計画的に行い、年間・学期・月ごと、そして研究授業のたびに研究への取組の評価・改善を行った。

② 学習環境の整備

- ・ 学校総体として教委室内の環境や学習のきまりごとについて共通理解を図り、共通実践を行った。

③ 定着の時間の工夫

- ・ 学校総体として学力の定着を図る「朝の学習タイム」「学力充実タイム」や個別指導が必要な児童を対象とした放課後の「個別指導タイム」を実施した。

④ 集会活動の充実

- ・ 自分の考えや思いを伝えること、人前で発表することに苦手意識を克服するため集会活動の充実に努めた。

⑤ 家庭学習の手引き

- ・ 学年に応じた家庭学習の内容を示す必要があると考え、「家庭学習の手引き」を作成し、全児童と保護者に配付した。

⑥ はッピー貯金

- ・ 「起きる時刻・学習を始める時刻・寝る時刻」を決めて生活のリズムを整える。

⑦ 読書活動の充実

- ・ 児童がたくさんの本に出会うように、時間設定の工夫と読書意欲を高める工夫の二つの視点から読書活動を推進してきた。

⑧ 教育講演会の実施

- ・ 子育てや家庭教育に関して保護者との共通理解を図り、家庭教育力を高める目的で、教育講演会を実施した。

⑨ 小中一貫・連携教育への取組

- ・ 中学の教師が小学校に出向き6年生対象に出前授業を行ったり、中学校校区の小中学校3校で相互に研究授業の参観を行ったりすることで、

児童・生徒の様子や発達段階についての共通理解を図っている。

(3) あさぎり町立あさぎり中学校

① 言語活動を通じた思考・判断・表現の能力の育成を図る授業の工夫と改善

- ・ 各教科等で積極的に言語活動を授業の中に仕組み、授業の構成や指導の在り方自体を工夫・改善していくことにした。また、研究授業では、授業工夫・改善部会で、参観の視点を検討した上で、事後研究会の運営を行った。

② 指導の系統性や発達段階を考慮した小中連携による指導の充実

- ・ あさぎり町では学校教育研究会を設置し小学校及び中学校の教科指導において連携を深めている。授業研究会では、校区内の小学校の先生方も参加していただき、協議している。家庭学習においては、小学校で作成されている「家庭学習の手引書」を参考にして、「家庭学習の取組み方」を作成した。
- ・ 小中学校で自主学習ノートを活用している。特に中学校では授業と家庭学習の結びつきを深め、学力向上につながるために、帰りの会の中で10分間の自主学習に取り組む時間を設けた。

③ 保護者やボランティアとの効果的な連携・協力による学習習慣の定着 ア 家庭学習計画表の作成

- ・ 家庭学習の習慣化による学力の向上と、自分の生活の振り返りによる課題を明確にするために、家庭学習計画表を作成した。

イ 学校支援ボランティアの活用

- ・ 地域の人材を学校支援ボランティアとして活用することにより中学校と家庭、地域及び学校が一体となり地域ぐるみで子どもたちの生きる力を育むことと、地域に開かれた特色ある学校づくりを推進することを目的に、地域で学校教育を支援する「学校応援団」づくりを行った。

○ 調査研究の成果

1. 推進校における取組の成果

(1) 合志市立西合志南小学校

① 県学力調査を活用した評価問題の正答率

- ・ 県学力調査問題を活用し、本校で作成し実施した読む力をはかる評価問題において、1回目と3回目を比較すると、正答率が向上し、無答率は減少した。

② 県学力調査の結果

- ・ 12月に実施した熊本県の学力調査の結果において、同一集団を経年比較すると、国語科の読むこと、書くことともに、大きく改善した。

③ 家庭学習の実施率

- ・ 児童に対して質問紙調査の結果、家庭学習の実施率はほぼ100%であった。

(2) 八代市立郡築小学校

① 全国学力・学習状況調査結果から

- ・ 算数は、A問題・B問題ともに、県・全国平均を上回った。

② 熊本県学力調査結果から

- ・ 3年間の推移を見ると、国語、算数ともに県平均を超える観点が増加してきている。

③ 質問紙調査結果から

- ・ 質問紙調査において、「算数の勉強が好きですか」の設問に対して、肯定的に回答した児童は93%と高かった。
- ・ 「授業で自分の意見を発表する機会がある」「理由を付けて発表できる」の設問に対して肯定的に回答した児童の割合が増加した。

(3) あさぎり町立あさぎり中学校

① 言語活動を通じた思考・判断・表現の能力の育成を図る授業の工夫と改善

- ・ 熊本県学力調査の国語において、第1学年の話すこと・聞くことの領域、第2学年の全ての領域、第3学年の活用の問題で改善傾向にある。

② 指導の系統性や発達段階を考慮した小中連携による指導の充実

- ・ 自主学習ノートの取組の前後にアンケート調査により、「現在、自主学習を頑張っている」「家庭で自主学習をスムーズに始めている」に関しては、肯定的な回答が増加した。

③ 保護者やボランティアとの効果的な連携・協力による学習習慣の定着

- ・ 平成25年1学期と2学期の実態の比較を行った。1年生は学習時間が減少しているが、2・3年生は学習時間が全体的に増加しており、「自分で計画を立てて勉強をしている」という項目については、2・3年生で肯定的な回答が増加した。

2. 調査研究全体の成果

(1) 推進地域について

① 基礎学力の定着や熊本型授業の質の向上に向けた取組について

- ・ 平成25年度全国学力・学習状況調査から、「知識」に関する問題に関しては、小中学校の国語、小学校の算数で、全国平均を上回る状況にあり、中学校の数学、全国平均をやや下回る状況にある。
- ・ 平成25年度熊本県学力調査から、敬語等の言葉に関する知識や、基本的な計算や観察・実験等の技能など、基礎的・基本的な知識・技能については、概ね定着傾向にある。

② 熊本県学力調査の問題や調査結果等を活用による教材の開発や学習活動の一層の充実について

- ・ 平成25年度熊本県学力調査質問紙調査（主幹教諭、教諭、講師）から、熊本県学力調査等の結果を指導方法の工夫改善等に活用している教員の割合が増加しているが、依然として5割に満たない。

③ 各教科における言語活動の効果的な位置付けや学習意欲を高める授業について

- ・ 平成25年度熊本県学力調査質問紙調査（主幹教諭、教諭、講師）から、授業で、文章、絵や写真、図や表、グラフなどを関連付けて読み取らせ、考えたことなどを表現させるような学習活動を行っている割合は、小学校では平成22年度以降、中学校では平成23年度以降、増加傾向にある。
- ・ 平成25年度熊本県学力調査結果から、話を聞いて内容を理解したり、図やグラフを見て情報を正確に読み取ったりすることなどについては、概ね定着傾向にある。

④ 個に応じた学習活動の一層の充実を図るための適切な学習評価の在り方について

- ・ 平成25年度熊本県学力調査質問紙調査（主幹教諭、教諭、講師）から、評価規準を踏まえ、学習の目標を明確にし、到達度を適切に評価し、指導の改善に生かした割合は、小中学校ともに増加している。

(2) 推進地域について

各推進地区においては、推進校へのきめ細かい指導や域内における研修会等において成果等の普及を図るとともに、熊本県学力調査及び全国学力・学習状況調査結果から研究成果の把握に努めた。

① 合志市

- ・ 学校支援ボランティアの取組や基礎学力向上のための組織的・継続的取組により、教職員の意識が高まるとともに、児童生徒の学習意欲の向上や学習への習慣化につながった。

② 八代市

- ・ 「学びの環境づくり」、「分かる授業づくり」、「学びの習慣づくり」の3つの視点から授業づくりにより、学力の定着や学習意欲において改善傾向が見られた。

③ あさぎり町

- ・ 言語活動の充実により、小学校国語科の学力の定着について改善が見られた。また、学習に対する意欲面については、小中学校ともに向上が見られた。

3. 取組の成果の普及

推進校である八代市立郡築小学校においては、県下に研究の成果を普及するために、研究発表会を開催した。また、その他の推進地区では、市町教育委員会主催の研修会等を通して、推進地区での研究成果の普及を図った。

推進地域としては、管内ごとに開催する教員の指導力向上を図る研修会や各学校への指導訪問等を通して、推進地域や推進校の取組やその成果の普及を図った。

今後も、推進地区、推進校の研究成果を研究発表会や公開授業、ホームページへの掲載を通して、県下に研究成果の普及を図っていく。

○ 今後の課題

(1) 平成25年度熊本県学力調査結果から、

○ 「図表やグラフ等を用いて、自分の考えが伝わるように書くこと」や「複数の資料から読み取った情報を関連付けて考え、表現すること」「観察・実験の結果を分析・解釈し、説明すること」など、自ら思考・判断し、目的や条件に応じて自分の言葉で表現する内容には、依然として課題がある。

○ 「知識」及び「活用」については、ほとんどの学年・教科で「知識」より「活用」に関する問題の定着率が低いが、一部の学年・教科では基礎的な「知識」に課題がみられる内容もある。

(2) 同調査における質問紙調査（児童生徒）から、中学校では、1か月に1冊も本を読まない生徒や宿題がないときは家で勉強しない児童生徒が年々増加しており、学校での読書時間の確保や、家庭学習の習慣化などは、今後改善すべき重要な課題である。

(3) 質問調査（主幹教諭、教諭、講師）から、小学校では平成23年度、中学校では平成24年度以降、評価規準（基準）の見直しを行う学校の割合が減少しており、評価の妥当性・信頼性を高めるため、各教科等の評価規準（基準）は常に見直しが必要である。

(4) 学力の結果と合わせて、学習に対する児童生徒の意識調査もしっかり分析し、学習意欲や学力向上に関する検証改善サイクルの確立と学校総体として授業改善に取り組むことが求められる。

(5) 「確かな学力」の育成については、学級づくりがその基盤であり、学習習慣、生活習慣等について、学校、家庭、地域が連携した取組が一層求められる。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」
平成25年度委託事業成果報告書

【推進地区】

都道府県名	熊本県	番号	43
-------	-----	----	----

推進地区名	あさぎり町
-------	-------

○ 推進地区として実施した取組の内容

1. 重点課題

- (1) 学力の定着を目指した、基礎・基本の徹底と、思考力・判断力・表現力等をもつ高める授業の工夫改善が更に求められる。
- (2) 通常学級に在籍する特別な支援を要する児童生徒に対する支援体制の工夫改善を図るとともに、特別支援教育の視点に立った「分かる授業」の推進が望まれる。
- (3) 5小学校・1中学校における、更なる小学校間の横のつながりとともに、学びの連続性を重視した小中連携の在り方が課題である。
- (4) 全国学力・学習状況調査の結果から、教育活動への保護者や地域の協力という点では全国と比較して低調である。既存する学校支援ボランティアを基盤とした学校応援団の組織の整備と推進による豊かで効果的な学習活動の工夫が望まれる。

2. 重点課題への取組状況

- (1) 基礎・基本の徹底と思考力・判断力・表現力等をもつ高める授業の工夫改善について

○ 校内研修の充実と授業展開や指導法の工夫改善に向けて、熊本県教育委員会指導主事の招聘及び本町指導主事の派遣を行い、町内の小中学校の授業者のほとんど(81/83人:97.6%)に指導助言を行った。各学校においても授業者全員が学力充実に向けたテーマに基づき研究授業を行い、授業改善に取り組んだ。特に、授業における基礎・基本の精選と、思考力・判断力・表現力等を育む場の設定とともに、児童生徒が課題を自己のものとして、見通しを持って学習活動が展開できるよう実践に取り組んだ。

また、学校訪問において、熊本県教育委員会指導主事や町外の管理職を教科指導員として招聘するとともに、町内の管理職を教科指導員として任命し、町ぐるみで教師の授業力や指導力等の向上に向け取り組んだ。また、このことは、管理職による各学校の様子や児童生徒の実態把握にもつながり、学校経営状況の確認や小中連携の上でも効果的であった。(表1)

さらに、定例の町内校長会議にて、全国学力・学習状況調査や熊本県学力調査結果を児童生徒質問紙回答状況とも合わせて分析し、各学校の課題と対策に向けて指導を行った。加えて、心のアンケート調査(熊本県教育委員会調査)の結果から見えてくる、情意面や生徒指

導面、生活習慣についても、学力と生徒指導が両輪である観点から、指導を行った。

表 1 平成 25 年度 指導主事等の招聘及び派遣数（のべ人数）

指導主事等の招聘・派遣数	小学校（5校）	中学校（1校）
熊本県教育員会指導主事招聘	4	5
町指導主事派遣	57	24
学校訪問時指導員等招聘	16	15

また、1年間の各学校の取組の成果と課題について、町内全教職員及び地域住民等に参加いただき、あさぎり町学校教育研究会実践発表会を開催した。各校の取組状況の公開と、地域住民の学校教育に対する理解と支援体制の充実を目的として、本年度は、小学校3校が実践発表を行い、小学校2校と中学校1校が紙上発表を行った。（参加者：町内外教育関係者、町内住民 計191人）（図1）

○ 実践発表内容は次のとおりである。

基礎・基本の徹底と思考力・判断力・表現力等を高めるための言語活動の充実を目指して、小学校国語においては、「食べ物ひみつブックを作ろう」、「本のショーウィンドウを作って椋鳩十の作品を紹介しよう」等、単元を貫く言語活動を設定して取り組んだ。中学校においては各教科で言語活動一覧表を作成し、目的意識を持った言語活動が効果的なものとなるよう取り組んだ。



図 1 あさぎり町学校教育実践発表会

また、小中学校それぞれにおいて、発達段階及び教科の特性を踏まえた上での「意見の述べ方・発表のしかた」や「話し合いマニュアル」等を作成し、児童生徒に自信を持って発表や話し合いができるような手立てを行った。加えて、発表に必要な要素や組み立て方についての学年に応じた系統的な指導にも取り組んだ。また、効果的な学び合いができるように「聞き方名人」等の聞く姿勢づくりや、意見・発表に対する意見・感想の述べ方、質問の仕方等の指導について取り組んだ。

○ 学力の定着を目指した取組として、小テストやフラッシュカード等による学び直しや、授業終末での振り返りを重視した授業づくりに取り組んだ。また、家庭学習の充実に向けた自主学习ノートの活用を小中学校で取り組んだ。中学校においては、帰りの会での10分間の自主学习に取り組む時間を設定し、一日の学習の振り返りとともに、その日の家庭学習への動機付けとして取り組んだ。

(2) 「分かる授業」の推進について

○ 特別支援教育支援員（町費）6人、特別支援教育教員補助員（緊急雇用対策費）5人を小中学校に配置し、特別支援教育の視点に立った学習の充実を目指し取り組んだ。各学校からは、さらに増員の要請があり、十分な配置人数ではないが、児童生徒の学びの様子からも効果的に活用がなされている。また、特別支援教育支援員等の研修会を実施し、支援の在り方等について理解を深める機会とした。

○ ICT機器の効果的な活用を目指し、町内にICT部会を設置し、電子黒板等の効果的な

活用方法や操作スキルの向上、各学校の活用状況の普及啓発を目指した取組を実施した。

(3) 学びの連続性を重視した小中連携について

- 町内小中学校それぞれの教職員が、発達段階における児童生徒の学びの様子や学習内容の理解を深め、小学校から中学校への学びを効果的につなげるために、部会を設置し、小中合同の授業研究会を実施した。算数・数学部会では、児童生徒の実態に関して情報交換を行い、「定着させておきたい・定着させてもらいたい」という切実な要望から、中学校入学前の春休みの宿題を中学校教師が作るなどの取組につながった。A E E 部会（Asagiri Enjoy English の略、部会員：小学校外国語活動担当者、中学校英語担当者、A L T）では、classroom English や daily question の共通実践、英語音声 C D 「I CAN DO IT !」（熊本県教育委員会作成）の紹介と活用、アルファベットとフォニックスについて等、A L T を交えて研修を行い、共通実践項目について確認した。

また、英語読本「**Asagiri welcome to our town**」を作成し、全中学生と各小学校に 8 部ずつ配布し、地域理解とともに、英語学習への取組の高まりと国際的な視野に立ったコミュニケーション能力の育成に向けて取り組んだ。（**図 2**）



図 2 英語読本の贈呈

- 豊かな心と基本的な生活習慣の育成を目指して、幼・保、小、中連携カリキュラムを作成し、育てたい子どもの姿を成長段階ごとに見直し、つながりを意識した取組を行った。併せて、小 1 プロブレムの解消に向け、小学校入学時にスタートカリキュラムを活用し、遊びから学びへの移行がスムーズにいくように、全小学校で取り組んだ。

(4) 学校応援団の組織の整備と推進による豊かで効果的な学習活動の工夫について

- 様々な人との関わりの中で、感謝の心や自尊感情を育むとともに、学習意欲の高まりによる効果的で豊かな学びを目指して、全学校で学校応援団を組織し、地域と一体となった学校づくりに取り組んだ。学習支援ボランティアにおいては、放課後や長期休業日を利用して、小学校では学習課題の丸つけ、中学校においては補充学習指導等に取り組んだ。その他実習等において、たくさんの知識や技術を身に付けておられる方に学習支援をいただいた。

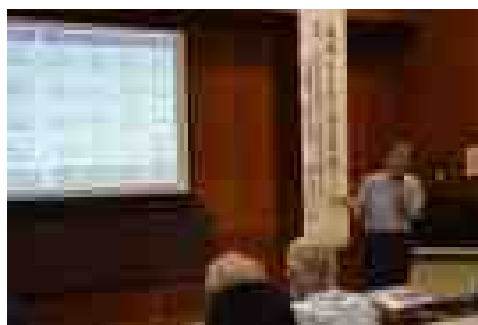


図 3 学校応援団連絡協議会総会

また、町内のそれぞれの学校応援団が連携・協力をしながら、活動を推進していけるように、あさぎり町学校応援団連絡協議会を設置し（**図 3**）、町民の「地域ぐるみの子育て・地域ぐるみの学校づくり」の意識の確立に向け取り組んだ。全公民館分館の年間計画に学校応援団活動を位置付けてもらい、安全見守り等、継続的に学校応援団活動を推進していただいている。

3. 調査研究の成果の把握・検証

- (1) 基礎・基本の徹底と思考力・判断力・表現力等を高める授業の工夫改善について

学力の定着状況については、熊本県学力調査結果の経年比較から見ると、言語活動等の取組により、国語においては小学校では向上していることが分かる。また、中学校においては、2つの学年では県の平均を上回り良好であった。しかしながら、小学校においては学年によって、「書く能力」「読む能力」に課題があり、中学校3年生においては「読む能力」に課題が見られる状態であった。（表2）

表2 平成24・25年度 熊本県学力調査の経年比較 国語（定着率）

国語		小4	小5	小6	中1	中2	中3
H24 (進級学年に変更)	町	54.0%	73.0%	56.9%	76.0%	60.5%	59.5%
	県	56.7%	71.9%	60.1%	75.6%	55.0%	53.6%
	差(町-県)	-2.7%	1.1%	-3.2%	0.4%	5.5%	5.9%
H25	町	63.6%	67.9%	69.2%	60.6%	61.7%	61.5%
	県	65.7%	66.6%	71.6%	59.8%	58.2%	63.1%
	差(町-県)	-2.1%	1.3%	-2.4%	0.8%	3.5%	-1.6%

表3 平成24・25年度 熊本県学力調査の経年比較 算数・数学（定着率）

算数・数学		小4	小5	小6	中1	中2	中3
H24 (進級学年に変更)	町	57.5%	57.0%	60.0%	57.3%	53.4%	36.6%
	県	59.6%	63.0%	58.6%	56.6%	54.8%	40.7%
	差(町-県)	-2.1%	-6.0%	1.4%	0.7%	-1.4%	-4.1%
H25	町	57.0%	47.6%	58.4%	48.2%	45.1%	39.8%
	県	62.1%	54.0%	63.7%	54.4%	47.4%	55.9%
	差(町-県)	-5.1%	-6.4%	-5.3%	-6.2%	-2.3%	-16.1%

算数・数学においては、表3からも、小中学校ともに県平均を下回り、厳しい状況にある。領域別では、小学校では主に「図形」と「数量関係」、中学校においては主に「数と式」と「図形」が課題である。領域や観点によっては良好な項目もあり、それぞれの学年・学級で分析を詳細に行い指導法の工夫改善につなげなければならない。町全体の重要な課題だと捉えている。

また、社会や理科においては学年で多少差があるが、概ね県平均と同程度もしくは上位にある。中学校英語においては、2年生において、県平均を上回るが、1・3年生においては、県平均より下位にあり、特に「書くこと」に課題が見られる。

情意面について、同じく熊本県学力調査の児童生徒質問紙の回答状況から、「あなたは、勉強は大切だと思いますか」において、「とても思う」+「まあまあ思う」の割合は、表4のように多くの学年で上昇しており、とくに中学校3年生においては、大幅な改善が見られた。

次に、「あなたは、勉強が『おもしろい』『楽しい』と感じることがありますか」において、「よくある」+「まあまあある」の割合は、表5のような結果であり、これは、先に記した学力の定着率と大きな相関関係があった。

また、「あなたは勉強でわからない内容が

表4 「勉強は大切と思うか」

	H24(進級学年に変更)		H25	
	割合(%)	差(町-県)	割合(%)	差(町-県)
小4(町)	96.6	1.9	93.8	-1.2
(県)	94.7		95.0	
小5(町)	96.0	1.0	97.1	2.5
(県)	95.0		94.6	
小6(町)	92.1	-1.3	95.2	-0.1
(県)	93.4		95.2	
中1(町)	95.9	1.1	89.6	-2.9
(県)	94.8		92.5	
中2(町)	93.9	1.8	94.2	3.8
(県)	92.1		90.4	
中3(町)	80.5	-9.7	90.8	-1.0
(県)	90.2		91.9	

表5 「勉強が楽しいと思うか」

	H24(進級学年に変更)		H25	
	割合(%)	差(町-県)	割合(%)	差(町-県)
小4(町)	78.1	-1.8	72.2	-8.1
(県)	79.9		80.4	
小5(町)	72.4	-7.5	75.0	-4.4
(県)	79.9		79.4	
小6(町)	78.1	-0.6	80.6	0.8
(県)	78.7		79.8	
中1(町)	74.6	-3.2	65.3	-3.7
(県)	77.8		69.0	
中2(町)	66.0	-4.0	68.6	3.3
(県)	70.0		65.3	
中3(町)	64.4	-2.3	69.0	-3.6
(県)	66.7		72.6	

あったとき、先生や友達に聞いたり、調べたりするなど、理解できるように自分なりに努力をしていますか」における「よくしている」+「まあまあしている」の割合は、表6のような結果であった。すなわち、表4の勉強に対する思いとそれに対する行動面は中学校3年生を除いては同じ傾向であり、言い換えると中学校3年生においては、さらに学習に対する積極性を育てる必要がある。

また、小学校4年生においては、表5との関係も考慮した上での、取組が必要である。

以上、熊本県学力調査と質問紙調査結果から、学力の定着においては、算数・数学と英語において思うような成果は得られなかった。情意面においては、児童生徒への他の質問内容からも向上が見られた。これは、各学校の取組が、児童生徒に届いているものであり、今後、情意面との関連を図りながら、学力の定着につなげる手立ての充実を図りたい。

(2) 「分かる授業」の推進について

教科に関する理解度について、熊本県学力調査の児童生徒質問紙の結果から、国語と算数・数学において「よく理解できている」+「だいたい理解できている」の回答状況は表7・表8のとおりである。国語においては、小学校4年生から中学校3年生までのほとんどの学年で昨年度より向上していた。

また、算数・数学においては、中学校において厳しい状況が続いている。

一方、少人数・TT指導及び通級指導により、児童生徒からは、「算数が分かるようになった」等の声や、学習意欲の向上が見られた。今後さらに、個に応じた細やかな指導の充実とともに、ドリルやパターン練習等で、「できた・分かった」の実感を伴うような基礎・基本の徹底のための手立てを講じる必要がある。また、そのことが応用する力にも大きくつながっていくものとする。

(3) 学びの連続性を重視した小中連携について

教科における小中連携として、算数・数学部会、AEE部会の2つの取組を行ったが、まず、それぞれの教科における教職員のつながりができたことがとても大きな成果の一つである。それぞれの授業での課題の共有から、教職員同士の学び合いや、教材開発に効果があった。また、町内の児童生徒を一緒に育てるという意識も深まり、とても有効であった。

さらに、学校間で学習内容の差が生じないように中学校へつなぐという人権教育や外国語活

表6 「自分なりに努力しているか」

	H24(進級学年に変更)		H25	
	割合(%)	差(町-県)	割合(%)	差(町-県)
小4(町)	93.1	7.5	86.1	2.1
(県)	85.6		84.0	
小5(町)	83.4	0.0	83.1	3.4
(県)	83.4		79.7	
小6(町)	83.6	5.0	81.2	3.7
(県)	78.6		77.5	
中1(町)	77.4	2.3	63.2	-0.5
(県)	75.1		63.7	
中2(町)	63.8	-0.5	68.0	11.7
(県)	64.3		56.3	
中3(町)	58.4	4.2	52.8	-3.4
(県)	54.2		56.3	

表7 国語の理解度

国語	H24(進級学年に変更)		H25	
	割合(%)	差(町-県)	割合(%)	差(町-県)
小4(町)	75.4	-4.6	82.6	-1.3
(県)	80.0		83.9	
小5(町)	79.9	-2.1	87.8	4.2
(県)	82.0		83.5	
小6(町)	83.0	1.8	84.2	1.0
(県)	81.2		83.2	
中1(町)	82.9	0.5	79.9	9.9
(県)	82.4		70.0	
中2(町)	78.5	10.4	80.8	18.3
(県)	68.1		62.5	
中3(町)	35.6	-23.6	59.9	-3.8
(県)	59.2		63.6	

表8 算数・数学の理解度

算数・数学	H24(進級学年に変更)		H25	
	割合(%)	差(町-県)	割合(%)	差(町-県)
小4(町)	82.9	-2.8	80.6	-1.1
(県)	85.7		81.6	
小5(町)	77.0	-3.2	83.7	2.1
(県)	80.2		81.6	
小6(町)	75.0	-4.8	81.2	1.7
(県)	79.8		79.5	
中1(町)	78.1	1.6	60.4	-2.1
(県)	76.5		62.5	
中2(町)	42.3	-17.2	41.3	-12.5
(県)	59.5		53.8	
中3(町)	48.3	-3.1	35.2	-14.3
(県)	51.4		49.5	

動等の指導計画の作成や確認ができた。

(4) 学校応援団の組織の整備と推進による豊かで効果的な学習活動の工夫について

既存の学校支援ボランティアを基盤とした学校応援団を各学校に組織し、学校応援団連絡協議会を設立した。また、地域による学校づくりを推進するために、学校地域づくり協議会が各学校に組織され、各学校の実態に応じて活動が推進された。学習支援として、小学校では放課後や長期休業日に丸つけや宿題等の指導を、中学校では長期休業日の個別指導や自習監督など、効果的な活用が図られた。また、児童生徒も地域の人からほめられたり、認められたりすることにより、学習意欲の向上とともに、自尊感情の醸成にもつながるものであった。教職員にとっても、地域の方々の学習支援により個に応じた指導の充実を図ることができた。

4. 今後の課題

(1) 基礎・基本の徹底と思考力・判断力・表現力等を高める授業の工夫改善について

- 算数・数学と英語において、学力の定着が不十分である。表7や表8の理解度の変化と学力の定着に関して経年比較から見ると、理解はできてきたが定着はできていないということになる。また、「書く能力」が不十分という結果でもあった。
- 基礎・基本の徹底を目指した学び直しや振り返りの充実、練習問題等の充実等、質と量を勘案した指導法の工夫が必要である。
- 何を視写し、何を思考して書くかなど、児童生徒の思考の流れや表現力の育成に向けた、「書くこと」を意識した、ノート指導やワークシートの工夫が必要である。

(2) 「分かる授業」の推進について

- 理解度の向上や思考力・判断力・表現力等を高めるためのペア学習や班学習等で、学び合う授業の充実を図る必要がある。
- 特別支援教育支援員等の配置や、少人数・TT指導、通級指導の活用により、個に応じた指導の充実をさらに図る必要がある。
- ICT機器の効果的な活用など視覚的情報を大切にしたい、特別支援教育の視点に立った指導法を推進する必要がある。

(3) 学びの連続性を重視した小中連携について

- 算数・数学部会やAEE部会の取組を、授業力の向上を目指した研修へと深める必要がある。
- 幼・保、小、中連携カリキュラムを見直し、「基本的な生活習慣」「人権を大切にする心」「ふるさと感」「勤労観・職業観」に「学力の充実」も視点として加えた取組を進めていく必要がある。

(4) 学校応援団の組織の整備と推進による豊かで効果的な学習活動の工夫について

- 家庭に対して、小中連携した啓発活動を行い、家庭学習の充実を図る必要がある。
- 各学校の実態に応じた学校応援団活動の推進と、学校応援団連絡協議会を基盤とした、各学校応援団間の情報交換や連携を推進する必要がある。併せて、地域住民に対して学校応援団活動の周知と、活動参加の啓発を図る必要がある。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」
平成25年度委託事業成果報告書

【推進校】

都道府県名	熊本県	番号	43
-------	-----	----	----

推進校名	熊本県球磨郡あさぎり町立あさぎり中学校
------	---------------------

○ 推進校として実施した研究内容

1. 重点課題

(1) 言語活動を通じた思考・判断・表現の能力の育成を図る授業の工夫と改善

授業者全員が思考・判断・表現の能力の育成を図る研究授業を行い、授業の改善を行う。また、熊本県教育委員会、熊本県立教育センター及び管内の指導主事派遣事業で講師招聘を行い、指導助言を参考に授業の改善や指導法の研究を推進する。

(2) 指導の系統性や発達段階を考慮した小中連携による指導の充実

小学校・中学校合同の教科部会で各教科等における指導法や学習訓練などに関して系統性や発達段階を考慮した学力向上のための手立てを協議する。

(3) 保護者やボランティアとの効果的な連携・協力による学習習慣の定着

地域や家庭と連携し、生活習慣や家庭学習の計画を立て、管理することで学習意欲の向上や学習習慣の確立を図る。

2. 重点課題への取組状況

(1) 言語活動を通じた思考・判断・表現の能力の育成を図る授業の工夫と改善

思考力・判断力・表現力等を育むためには、言語活動が重要であり、各教科等の目標と指導事項との関連及び児童生徒の発達の段階や言語能力を踏まえて言語活動を計画的に位置付けることが求められる。そこで、各教科等で積極的に言語活動を授業の中に仕組み、授業の構成や指導の在り方自体を工夫・改善していくことにした。そして、授業実践の中から授業実践シート(図1)を授業者一人につき1枚にまとめた。授業実践シートを作成することで、一人一人が言語活動を意識した授業の工夫、改善を行った。1単位時間の授業の中で、言語活動を、どこに、どのように位置付けていくかを考え、計画の段階から意識して授業づ



図1 授業実践シート

くりを行うようにした。具体的には、思考・判断したことを主体的に表現できる生徒を育成するために、どのような言語活動を行ったかをワークシートやノートに例示した。また、その時間の目標により近づくために、どのような意図で言語活動を取り入れたかを考えるようにし、その成果と課題を記入するようにした。

また、研究授業では、参観者の視点を明確にした。授業工夫・改善部会で、参観の視点を検討した上で、事後研究会の運営を行った。参観の視点づくりと、授業分析の役割分担（時間配分、発問と生徒の反応、教材教具の提示、板書、評価）を行ったことで、授業分析を詳細に行うことができ、授業の振り返りに役立てることができた。図2は参観の視点をまとめたものである。授業研究会ではこの表を用いて協議を行った。

図2 研究授業参観の観点

さらに、熊本県教育委員会及び管内の指導主事を講師として招聘し、指導助言をいただいた。「言語活動の工夫改善としては、本時の学習内容だけに着目して言語活動を構築するのではなく、新しく学ぶ事項と既習事項で構成されている言語活動を実施することが望ましい。そのような言語活動を、単元ごとに実施していくことが既習事項を活用させることになる。」という助言をいただき、英語科においては、熊本県教育委員会作成の英語科教材「I CAN DO IT!」をリスニング、基本文の暗記・暗唱（ライティングも含む）、自己表現の活動において全学年で取り組んだ。2月には昨年度から実施されている『くまモン英語チャレンジ』に今年度も全員挑戦した。

また、学習指導要領では、生きる力をはぐくむことを目指し、基礎的・基本的な知識・技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うために、言語活動を充実することが求められている。

そこで、各教科における言語活動を洗い出し、日常の授業の中で言語活動を意識した取組を行うことにした。言語活動の分類については平成20年度中教審答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」によって分類されており、

言語活動①：体験から感じ取ったことを表現する。

言語活動②：事実を正確に理解し伝達する。

言語活動③：概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする。

言語活動④：情報を分析・評価し、論述する。

言語活動⑤：課題について、構想を立て実践し、評価・改善する。

言語活動⑥：互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。

った。

また、小中学校で自主学習ノート（図5）を活用している。特に中学校では授業と家庭学習の結びつきを深め、学力向上につなげるために、帰りの会の中で10分間の自主学習に取り組む時間を設けた。取組の方法は以下のとおりである。

- ①自主学習ノートに定規を使って決められた枠をつくる。
- ②取り組む内容を、その日に学習した6教科の中から4教科選び、教科名を書く。
- ③決めた教科の学習を始める。

担任は、その際は机間指導をし、個別に対応を行った。また、自分の学級以外にも入り、専門教科の指導を行うようにした。副担任も、各学級を回って専門教科の指導を行った。



図5 自主学習ノート

(3) 保護者やボランティアとの効果的な連携・協力による学習習慣の定着

①家庭学習計画表の作成

家庭学習の習慣化による学力の向上と、自分の生活の振り返りによる課題を明確にするために、家庭学習計画表を作成した（図6-1）。保護者は子どもの学習に関心はあるものの、なかなか家庭学習に積極的に関わることができず、学校に一方向的に任せている傾向にある。そこで、定期テスト前に生徒が家庭学習計画表を作成した後、保護者にも励ましのコメント（図6-2）を計画表内に記入してもらい、学校との連携を図った。保護者からのコメントにより、取組が一体化された。また、宿題を忘れた生徒と一緒に、作成した計画表を使って昨夜の生活の確認を行い、課題を見つけることができた。さらに、生徒同士で計画表を見せ合う機会を設定し、学習意欲の向上につなげた。

図6-1 家庭学習計画表



図6-2 家庭学習計画表の保護者コメント

②学校支援ボランティアの活用

学校では様々な教育活動や学校運営に、保護者や地域の方々の支援をいただいている。そこで、学習面においても、地域の人材を学校支援ボランティアとして活用することにより中学校と家庭、地域及び学校が一体となり地域ぐるみで子どもたちの生きる力を育むことと、地域に開かれた特色ある学校づくりを推進することを目的に、地域で学校教育を支援する「学校応援団」づくりを行った。長期休業中に生徒の学習会を各学年で行った。学校支援ボランティアとして、保護者や地域の皆様に協力いただき、学習会に参加して教師のサポートをしたり、生徒の自主的な学習活動の場面においては自習監督をしてもらったりした。来年度は、高校生や大学生のボランティアにも協力を依頼していきたいと考えている。

3. 調査研究の成果の把握・検証

(1) 言語活動を通じた思考・判断・表現の能力の育成を図る授業の工夫と改善

熊本県学力調査において、第1学年国語科の話すこと・聞くことの領域において県平均を12.0ポイント上回った。また、第3学年では活用の問題で県平均を3.0ポイント上回った。第2学年では、すべての領域で県平均を上回っており、活用の問題では11.7ポイント上回った。そして、第2学年の英語科においては、聞くことの領域はわずかに県平均を下回ったものの、残りのすべての領域で県平均を上回った。

(2) 指導の系統性や発達段階を考慮した小中連携による指導の充実

自主学習ノートの取組を検証するため取組の前後にアンケート調査を行ったところ、以下のような結果が得られた(表1)。「現在、自主学習を頑張っている」という設問に対して、肯定的な回答をした生徒が取組前と取組後では17ポイント増加しており、「家庭で自主学習をスムーズに始めている」に関しては、肯定的な回答が取組前と取組後では31ポイント増加した。

表1 自主学習の取組前後の検証

設問	質問	時期	5	4	3	2	1
1	自主学習は学力の向上につながると思う	取組前	5	13	68	4	10
		取組後	11	36	40	4	9
2	現在、自主学習を頑張っている	取組前	15	20	48	9	10
		取組後	28	29	37	7	4
3	家庭で自主学習をスムーズに始めている	取組前	13	10	25	32	20
		取組後	14	40	29	11	6
4	1時間のうちの10分程度は必ず集中できる	取組前	27	43	19	7	4
		取組後	25	28	37	7	3
5	今年もこのやり方で続けたい	取組前	25	28	37	7	3
		取組後	15	20	48	10	7

(3) 保護者やボランティアとの効果的な連携・協力による学習習慣の定着

平成25年1学期と2学期の実態の比較を行った(図7-1, 2)。学習面では、1学期において、1年生の学習時間の

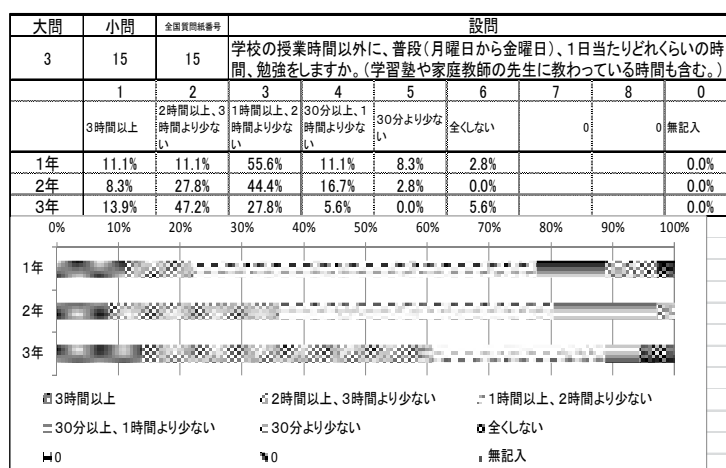


図7-1 1学期の実態

割合が「1時間以上2時間より少ない」が全体の50%を占めていたが、その割合が40%に減少し、「30分以上1時間より少ない」が1学期より24ポイント増加している。2年生は、「2時間以上3時間より少ない」という生徒の割合が28%から43%へ15ポイント増加している。3年生も「1時間以上2時間より少ない」が54%から42%と12ポイントへと減少し、

「2時間以上3時間より少ない」や「3時間以上」が増加している。よって、1年生は学習時間が減少しているが、2・3年生は学習時間が全体的に増加していることが分かる。「自分で計画を立てて勉強をしている」という項目については、1学期で2・3年生は「あまりしていない」「全くしていない」の割合が高かったが、2学期は2年生が約14ポイント、3年生が46ポイントと大幅に増加した。

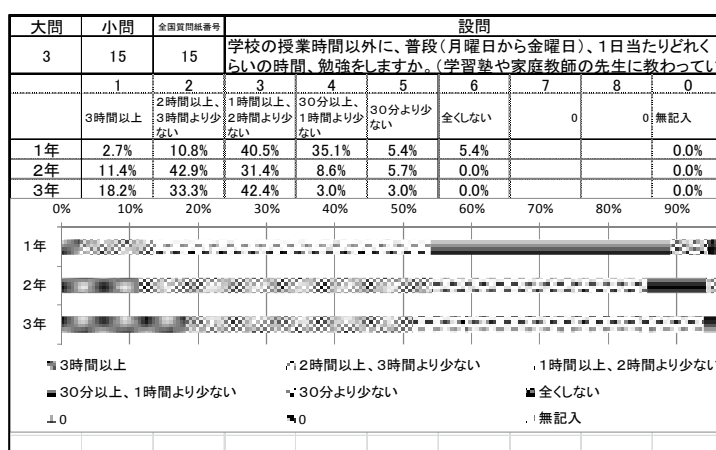


図7-2 2学期の実態

4. 今後の課題

研究の取組から見えてきた課題は、以下のとおりである。

(1) 言語活動を通じた思考・判断・表現の能力の育成を図る授業の工夫と改善

- 数学科及び英語科の各領域、観点、知識・活用において全体的なレベルアップをする必要があり、思考力・判断力・表現力等を支える基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る必要がある。
- 全職員での共通実践できる内容と教科の特性を生かして取り組む内容を再度明らかにし、学校総体として組織的に取り組む必要がある

(2) 指導の系統性や発達段階を考慮した小中連携による指導の充実

- 小学校時点における学習上の課題が中学校と十分共有されておらず、情報だけの連携となっているので行動連携できるように、学校教育研究会を推進しなければならない。
- 小中連携による指導を推進する研修を合同で行い、各教科等の指導方法及び評価、指導形態や学習訓練に関すること、生徒指導や人権学習、健康教育などの取組について、対象者、時期、回数を明確に決め、年間計画に位置付けておく必要がある。

(3) 保護者やボランティアとの効果的な連携・協力による学習習慣の定着

- 自主学習ノートに関しては、予習をする部分を設定して次時の授業に生かせるようにしたり、授業のまとめの部分を積極的に復習させたり、熊本県学力調査において定着率が低かった項目に関して、意識的に取り組ませたりする必要がある。
- 定期テスト前に家庭学習計画表を作成するばかりでなく、学期ごとに家庭学習計画表を作成する必要がある。また、自主学習ノートに家庭からのコメントをもらったりするなど積極的に家庭との連携をとることが重要である。

(様式2)

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」
平成25年度委託事業成果報告書

【推進地区】

都道府県名	熊本県	番号	43
-------	-----	----	----

推進地区名	合志市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組の内容

1. 重点課題

平成25年度は、合志市教育委員会指導指針を「未来に輝く心豊かな人材を共に育む～確かな学力の向上・豊かな心の育成・たくましい心身の育成～」とし、以下の4項目を指導の重点キーワードとして取り組んだ。

- ① 家庭・地域・学校が連携し、地域に根ざした開かれた学校づくりをすすめる〔合志版コミュニティ・スクールの推進〕
- ② 情報通信技術を効果的に活用した、分かりやすく深まる授業を実現し、確かな学力の向上を図る〔ICT教育の推進〕
- ③ ことば教育の推進と適切な言語環境の整備につとめ、いじめや不登校のない学校づくりをすすめる〔「ことば教育」の推進〕
- ④ 将来に夢と希望を持ち、日本の伝統文化を理解するとともに、国際感覚を身につけた子どもを育てる〔英語活動の推進〕

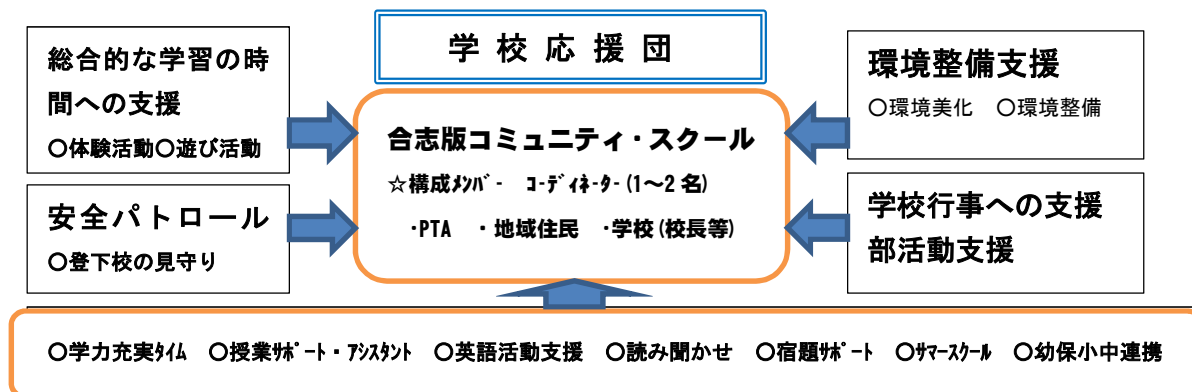
特に「合志版コミュニティ・スクール」では、学校と地域の人々の間で学校教育目標を共有し協働による取組を進めた。学力向上に向けて、ボランティアによる学習支援や放課後寺子屋教室に積極的に取り組んだ。

また「ことば教育」を市内の全小・中学校で推進し「ことば」を大切にする情感豊かな子どもたちを育てた。各学校の“ことば教育担当者”による山口県萩市への先進地視察研修成果を、学校のさまざまな教育活動に取り入れていった。全国学力・学習状況調査や熊本県学力調査の結果分析と考察をおこない、教職員の授業力の向上を図ることを重点課題として取り組んだ。

2. 重点課題への取組状況

(1) 合志版コミュニティ・スクールの推進

合志市は、家庭・地域との連携を図った基礎学力向上システムを構築するために、平成24年度から「合志版コミュニティ・スクール」を推進している。以下のような構想図のもと、各学校ごとに推進メンバーを選任して取組みをおこなっている。



(2) 市学力向上研究校の指定

3年サイクルを基本として、合志市立の全小・中学校に「市学力向上研究指定」をおこない2カ年の研究に取り組ませている。平成25年度は研究指定2年目にあたる小学校2校・中学校1校の研究発表会と、研究推進校を含む小学校3校と中学校1校の新たな研究指定を行った。学力充実研究指定校の研究発表概要は次の通りである。

期 日	学校名	研 究 主 題
H25. 11. 1(金)	合志南小学校	コミュニケーション能力をはぐくむ教育実践 ～自己表現活動を取り入れた授業づくりを通して～
H25. 11. 15(金)	西合志中学校	生徒一人ひとりの確かな学力を育てる学習基盤づくり ～なかまとともに高め合う双方向の言語活動を中心に～
H26. 1. 23(木)	西合志東小学校	確かに読み取り進んで表現する子どもの育成 ～国語科指導における「習得のさせ方」の工夫を通して～

3校ともすべて研究紀要を作成し参観者等に配布している。また研究会当日は全体会での研究概要説明、公開授業、分科会をおこない研究を深めた。

研究推進校である西合志南小学校は今年度からの指定で、研究主題「国語科における『確かな学力』を持ったこどもの育成～読解の活用型授業における基礎・基本の習得を目指した指導の工夫～」に取り組んでいる。当該校に対して、合志市教育委員会としては概要訪問、経営訪問をおこない実態の把握と指導・助言をおこなった。

(3) ICT教育の推進

ICT機器の効果的な活用で、児童の学習への興味関心を高めたり、思考の支援を行う取組を行った。市教育委員会も先進地視察として山江村や高森町の研究発表会に参加し、今後の機器活用に関する情報を積極的に収集している。またICT教育担当者会を組織して、特別支援学級を主とした、タブレット端末の購入を協議している。研究推進校の西合志南小学校はICT教育推進モデル校に指定して機器等の購入を優先して進めている。今年度は電子黒板ユニット、書画カメラ、電子黒板用ノートパソコン等125万円程度を当該校で購入して授業に活用した。

平成26年2月18日(火)に公開授業を行い、2・4・5年の国語、算数、社会の授業の中でデジタルハイビジョンカメラ、タブレット、アニメーション映像、書画カメラ、パワーポイント等の効果的な活用を公開した。市教委の指導主事で講評をおこなった。



ICT教育公開授業の様子

(4) 「ことば教育」の推進

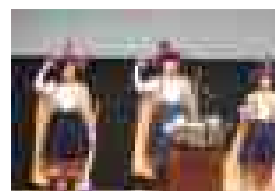
適切な言語環境の整備と、話す・聞く・伝えるといった表現力の育成を図るため「ことば教育」を推進した。学校生活の一日を通して豊かな言語環境を意識した実践を行うとともに、授業では元RKK熊本放送アナウンサーの岩元克雄先生を専任の外部指導者として、各小中学校が計画的に活用している。基本的な発声、スピーチの仕方、感情を込めた朗読など模範を示してもらいながら、児童生徒の興味・関心・意欲を高め成果をあげている。

また各小中学校の「ことば教育担当者」で、平成25年6月12～13日に山口県萩市の先進地視察研修を行った。萩市教育委員会で市教育方針を伺い、明倫小学校の朗唱教育等、特徴的な取組を授業参観した。研修報告書を冊子にまとめて各小中学校に配布した。

(5) 英語活動の推進

小学校への外国語活動の導入にあわせ、英語を通して世界に視野を広げコミュニケーション能力を高めていくために、平成25年10月5日(土)に小学校5年～中学校3年を対象に「英語チャレンジ大会」を開催した。各学校で出場希望者を募り、夏休みから9月に

かけて、ALTや英語指導講師の協力・指導を受けながら英会話を高めていった。外国語指導助手(ALT)および各小中学校の英語担当者を実行委員として大会の運営、進行にあたり、参加した子どもたちは自分の趣味や特技、夢や希望などを英語でスピーチした。ALTによる英語クイズ大会等も開催して楽しい活動ができた。



西合志南小学校の発表

3. 調査研究の成果の把握・検証

合志市として取り組んだ4つの重点課題に対して、その成果と達成率を10小中学校の校長にアンケート調査した。その結果は下記のとおりである。 達成率；%

合志版	学校支援ボランティアの活動は広がったか	小 82.5	中 75.0	80.0%
コミュニティ・スクール	基礎学力向上システムとしての学習支援ボランティアは活用できたか	小 77.5	中 57.5	72.5%
確かな学力の向上	熊本型授業による研究授業により授業改善は進んだか	小 82.5	中 75.0	80.0%
	県学力調査、全国学力学習状況調査等の結果活用はできたか	小 82.5	中 75.0	80.0%
ICT教育の推進	授業へのICT機器の活用は進んだか	小 65.0	中 50.0	60.0%
	ICTを活用した分かる授業、深まる授業づくりはできたか	小 52.5	中 57.5	55.0%
ことば教育の推進	ことば教育で、子どもや教師の言語環境の改善が見られたか	小 67.5	中 75.0	70.0%
	ことば教育の推進は、安全・安心な学校づくりに役立ったか	小 75.0	中 75.0	75.0%
英語活動の推進	英語チャレンジ大会に、学校全体としての取り組みができたか	小 67.5	中 75.0	70.0%
	英語チャレンジ大会は、児童生徒に夢を持たせることができたか	小 75.0	中 75.0	75.0%

学習支援ボランティアに低学年の国・算の支援をしてもらい児童の学習意欲は高まっている。西合志南小校区では、地域ボランティアによる「放課後寺子屋」を開設し、低学年40名が参加した。意欲的に学習する姿が見られ学習の習慣化へとつながっている。

市研究指定を受けたことで研究授業を中心に、学力向上への教職員の意識の高まりが見られる。基礎学力向上のための組織的・継続的な取り組みが出来て学習意欲も向上した。西合志南小をICT教育推進モデル校に指定して機器を購入したことで、ICTを活用した授業の在り方を研究授業で実践して教職員の意識を高めることができた。

講師招聘による「ことば教育」の継続により、自分の言葉で伝える力がつき、思いやりのある交流ができるようになった。朝の活動に音読や群読の時間を設け、指導内容も学年の系統性を明確にして取り組むことで、児童生徒の言語環境は少し良くなってきている。

英語チャレンジ大会は小5～中3の対象学年から積極的な参加があり、チャレンジ精神を育むことができた。参加した児童生徒は、とても英語に慣れ親しみ全校生徒の前でも自信を持って発表できている。教職員との夢の共有もできつつある。

4. 今後の課題

合志版コミュニティ・スクールはかなりの成果を収めているが、中学校の地域コーディネーター配置や推進委員会の設置が遅れているため整備を進めていく。

県学力調査の結果を考察すると、まだ学年・教科によって県および菊池管内の定着率を下回っている状況がある。今後も引き続き、年度ごとに3～4校の市学力向上研究指定をおこない、学校をあげて組織的に授業の質の向上と改善を図っていく。ICT教育については機器の導入に関して予算措置も必要なため、次年度は4小学校の特別支援学級から整備をすすめ、効果的な活用についての検証をおこなっていく。

重点課題の4項目については継続的な取り組みを行うとともに、市全校をあげてアメリティ教育環境づくりによる「認め・ほめ・励まし・伸ばす」教育を徹底していく。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」
平成25年度委託事業成果報告書
【推進校】

都道府県名	熊本県	番号	43
-------	-----	----	----

推進校名	熊本県合志市立西合志南小学校
------	----------------

○ 推進校として実施した研究内容

1. 重点課題

近年の本校の課題として学力2極化傾向が挙げられる。「話せない」「書けない」「読めない」児童に共通するものは何か。そして、その解消のためにはどこに焦点を当てればよいのか。学習指導要領の改定の趣旨を十分に踏まえながら、授業における下位グループへの手立てをどう工夫するのか。すべての子どもに基礎・基本の確実な習得をどう進めていくのかが学校全体の大きな課題である。

本校は研究テーマを、「国語科における『確かな学力』を持った子どもの育成」とし、サブテーマを「読解の活用型授業における基礎・基本の習得を目指した指導の工夫」とした。本調査研究の趣旨にもあるとおり、「つまずきやすい学習内容の確実な習得や知識・技能を活用する授業の展開に向けた工夫改善」のための研究である。特に全国学力・学習状況調査の結果で課題となった読む力の習得について、授業のみならず様々な視点から習得に向けた取り組みを実践していく必要があると考えた。重点課題を①読む力の土台となる基礎・基本の確実な習得②習得したことを活用するための言語活動を充実させた授業展開の工夫の2点とした。

これらのことを踏まえ、授業においては読みの観点10を活かした身につけさせたい力の系統化と単元を貫く言語活動の充実、さらに日常活動の充実や読書活動の推進、家庭学習との連携等を取り組んでいった。

2. 重点課題への取組状況

(1) 読む力の土台となる基礎・基本の確実な習得に向けた取組

読む力をつけるために、まずは基盤となる児童の言語環境を整える必要がある。さまざまな日常活動、家庭学習等の取組を行った。その内容は授業の予習、復習のようなつながりのある内容だけでなく、話すこと、聞くこと等の基礎となる活動も幅広く行った。それぞれの取り組みをまとめる。

① 朝自習を活用した日常指導

ア 学力充実タイムの取組

火曜日の朝自習を「学力充実タイム」と位置づけ、1年分のプリントを作成し、学年統一して取り組んだ(写真1)。それぞれの学年の新出漢字と計算の問題を作成。毎週、学年で同じプリントに取り組むことで、学級差が出ることなく基礎基本の力をつけることができると考えた。約10分でプリントの問題を解き、残りの5分間で答え合わせやり直しをさせた。また、定期的に漢字大会等の取組も実施。記録証を作り、児童が目標を持って取り組めるようにした。



写真1
学力充実タイムで使用しているプリント

イ かがやきタイムの取組

木曜日の朝自習に「かがやきタイム」を位置づけた。内容は、「日本語のひびきやリズムを楽しむ一斉音読」と「コミュニケーショントレーニング」である。

コミュニケーショントレーニングは全校統一した内容を実践している。段階を踏みながら、自分の意見の言い方、理由の言い方、丁寧な言い方等を学ぶ時間である(写真2)。プリントは年間分を冊子化した(写真3、4)。

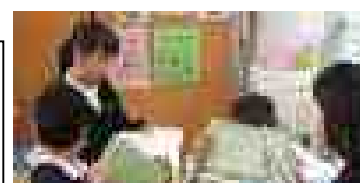


写真2
コミュニケーショントレーニングの時間。

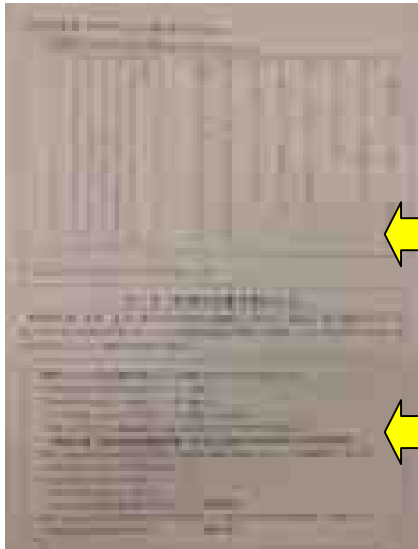


写真3
かがやきタイムのプリント

上段は「日本語のひびきやリズムを楽しもう」。清少納言の枕草子である。「春はあけぼの」から始まり、この回は「冬はつとめて」を読んだ。横に解説も入れている。

下段は「コミュニケーショントレーニングをしよう」。この回は「反対の立場で考えよう」である。先生と練習、ペアで練習というように対話形式で練習を重ねていく。



写真4
「ことばのホップステップジャンプ」は各学級で児童が発声練習をするために教師側で選んだ早口言葉や詩等をまとめたものである。低学年版と高学年版を準備した。併せて「かがやきタイム」の資料として今年度は全て年間分を冊子化した。

ウ 読書タイムの取組

金曜日の朝自習の時間は読書タイムとした。そして、毎月第1金曜日は本県の道徳の副読本「熊本の心」の本を読むことにしている(写真5)。それ以外は本に関する指定はせず、児童が好きな本を読んだ。読書に関してはさらに充実した取組が必要である。

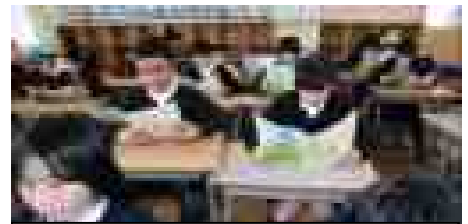


写真5 「熊本の心」の読書タイム

本年度は毎週月、木、金曜日の15時55分から16時30分を個別指導の時間として位置づけている。児童のつまずきに合わせて、学年を越えて基礎学習のプリントの活用ができるようにした(写真6)。プリントは図書室前のプリントケースに入れてあり、自由に誰でも利用できるようにした。

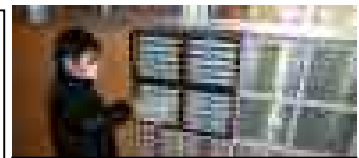


写真6
図書室前のプリント棚

③ 家庭学習の指導



写真7 学習の手引き

ア 全学年共通の「学習の手引き」の作成

ステップ1は必ずやる学習、ステップ2は進んでやる学習として、学習の進め方がわかるようにした。ステップ2では内容を習熟と発展に分け、児童が自分の学習状況を見つめて選択できるようにした。この「学習の手引き」は全学年音読カードに貼り付け、児童が毎日活用している。

イ 読解力向上を目指した宿題の工夫

児童の毎日の家庭学習には、読解力向上のために、読み取りのプリントを出すようにした。思考力を問う問題と、表現力・活用力を問う問題をバランスよく出すことを心がけた。宿題の丸つけ・やり直しでは、解説を入れるようにした。例えば、高学年では、要旨をまとめるキーワードをみんなで確認したり、読み取りのポイントを押さえたりした。また、書く作業に抵抗を感じる児童が多いため、読み取りだけに終わらず、最後には自分の意見を書かせることも心がけた。

ウ 家庭との連携

学習の様子を家庭と協力して見守っていくことにした。今年度は毎日行う音読カードのチェック欄の横に、家庭学習チェックの欄を設けた(写真8)。宿題・自学をきちんとやっているかだけでなく、学習の様子も伝えてもらうようにした。

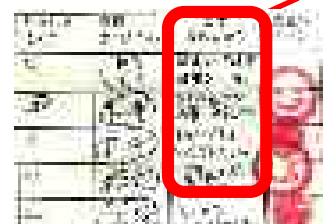


写真8 音読カード

④ 言語環境の整備

教室および校内の掲示物の充実に向けて、全教室に正しい姿勢のポスター、また、低学年～高学年と系統性を考えた発表の仕方・聞き方や声のものさしを掲示した。また、校舎内も地方新聞の子ども版や俳句、四字熟語等の掲示を行い、季節に応じて定期的に更新した（写真9）。

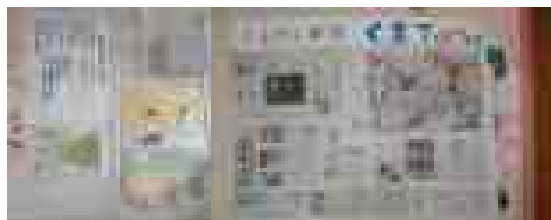


写真9 校舎内の掲示の充実

(2) 習得したことを活用するための言語活動を充実させた授業展開の工夫

読解の授業の単元構成を図1のような流れとし、単元を貫く言語活動を学習の柱として、そこに向けて身につけるべき基礎・基本をしぼった教科書による学習を全校で取り組んだ。そして、授業改善のポイントを3点掲げて、基礎・基本の習得の授業の質の向上に努めた。授業改善のポイントは「身につけさせたい力の明確化」「習得の授業づくりの工夫」「単元を貫く言語活動と習得の時間を関連付ける構成の工夫」である。

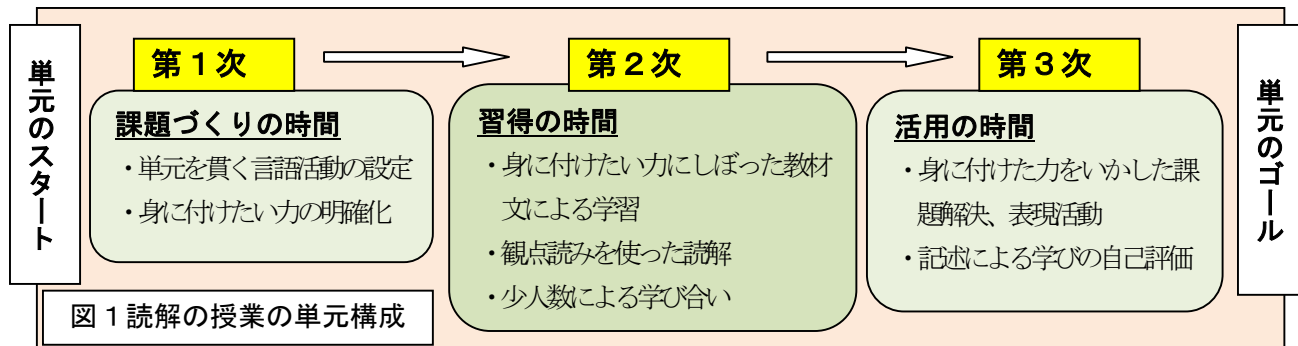


図1 読解の授業の単元構成

① 授業改善のポイント

ア 身につけさせたい力の明確化

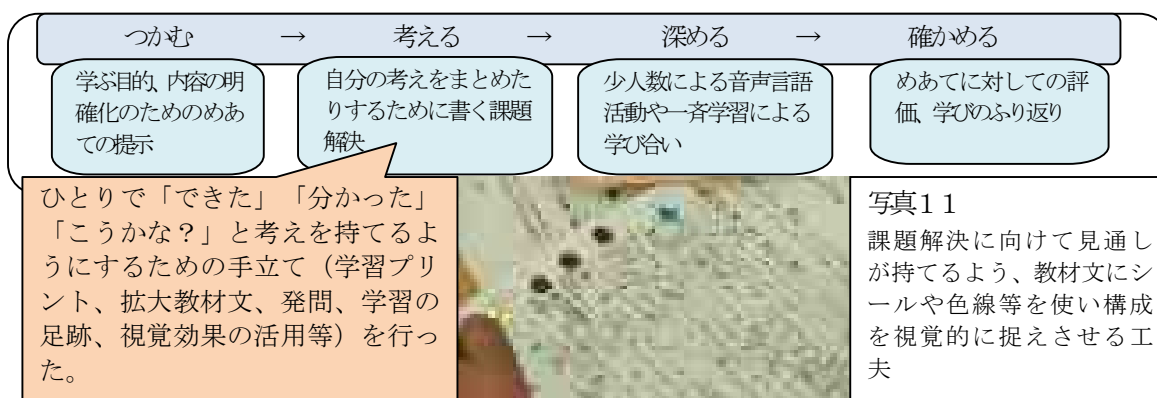
本校では、「読みの系統一覧」や「習得させたい読みのスキル（写真10）」等を「習得読みテキストブック」として冊子にまとめている。このテキストブックをもとに、その学年、単元で身につけさせたい力が何かをはっきりとさせ、指導の重点化を図った。そして、単元の第1次を課題づくりの時間とし、この単元でどんな力を身につけるのか児童にはっきりと示し、学習に対する見通しを持てるようにした。さらに、授業では毎時間自己評価をすることで、自分の学びを確かめさせた。1時間で何を学ぶのか、児童も教師も明確にした授業が展開されるようにした。



写真10「習得させたい読みのスキル一覧」指導系統や重点を全体で意識して行った。

イ 習得の授業づくりの工夫

図2 1単位時間の学習展開のイメージ



ひとりで「できた」「分かった」「こうかな?」と考えを持てるようにするための手立て（学習プリント、拡大教材文、発問、学習の足跡、視覚効果の活用等）を行った。

写真11 課題解決に向けて見通しが持てるよう、教材文にシールや色線等を使い構成を視覚的に捉えさせる工夫

習得の1時間の授業を4つの段階に分けた(図2)。特に、考える段階では課題解決に向けて児童が見通しを持てるように、教材文への書き込み、学習プリントの工夫、板書、発問の工夫、視覚的な効果等も活用しながら様々な手立てを講じ(写真11)、児童がひとりで自分の考えを持てるようにした。そのために考えて書く時間の確保も行った。

ウ 単元を貫く言語活動と習得の時間を関連付けるための構成の工夫

学校で作成した「単元構成づくりの3段階」をもとに、身に付けさせたい力に対して単元を貫く言語活動が適したものか吟味しながら単元の指導計画を立てた。特に習得の授業において、単元を貫く言語活動とつながるような学習活動にしていくように工夫した。習得の時間と活用の時間の学習過程を同じように組み段階的に学んでいく方法や、活用の時間に行うことを習得の時間に繰り返して行う反復学習(写真12)等を取り入れ、身に付けた力が活用の時間に活かせるという実感が持てるようにした。



写真12「乗物図鑑」を作るために、繰り返し文章の書き方(構成)を習得する授業

エ 実践例 「第4学年『くらしの中の和と洋』」観点読みを生かした習得の授業

○目標 キーワードを手がかりに説明の部屋を3つのまとまりに分けることを通して、段落ごとの関係を考えることができる。

過程	学習活動	T:教師の主な発問 C:児童の反応 指導上の留意点・評価
つかむ	1. 課題をつかむ。	T: これまでに学習した「ブックづくりのヒント」を思いだそう。 C: はじめとおわりの部屋はわかったぞ。
考える	<p>キーワードを手がかりに、説明の部屋を3つのまとまりに分けよう</p> <p>2. まとまりに分けるための読み方をおさえる。</p> 	<p>T: 何を手がかりにしてまとまりに分けていくといいでしょうか。 C: 段落と段落の関係をみるとまとまりがわかるかもしれないぞ。 C: 接続語や文末表現に注目してみよう。</p> <p>徹底指導: まとまりに分けるために、キーワードを手がかりにすることをおさえる。</p>
	<p>3. 自力で説明の部屋を3つのまとまりに分け、「決め手」(根拠)を書く。</p> 	<p>形式段落の要点を色分けし、視覚的に訴え、対比されている事柄に気づかせるようにする。</p> <p>T: 自分でまとまりに分けてみましょう。 C: 「問いかけ」の「答え」はどこかな。 C: 「まず」「次に」のような順序で考えると分かりやすいな。 T: まとまりに分けた決め手を書きましょう C: 発言の仕方に沿って伝えるぞ。</p> <p>能動型学習: 意見を交流し、自分の意見に自信をもったり(共通点)、新たな考えをもったり(相違点)する。</p>
深める	4. お散歩対話で交流する。	<p>T: お散歩をして伝え合いましょう。 C: ④～⑩は「部屋の中での過ごし方」についてのまとまりだな。 C: ⑫・⑬は、⑪の説明じゃないかな。 理由は、「～です」のような言い切りの形だから。</p>
確かめる	5. 全体で段落と段落の関係を確かめる。	<p>T: 段落と段落の関係を確かめてみましょう。 C: ⑥と⑦は「問い」と「答え」の段落だな。 C: ③や⑤は段落の中で対比されていたんだ。 C: 段落同士の関係が分かったぞ。</p> <p>全体の場で、段落相互の関係を確かめさせる。</p>
	6. 今日の「『くらしの中の和と洋』ブックづくりのヒント」を確認する。	<p>T: 見やすい文章にするには、まとまりを作ることが大切なんだ。 C: 「『くらしの中の和と洋』ブック」づくりに生かそう。</p>

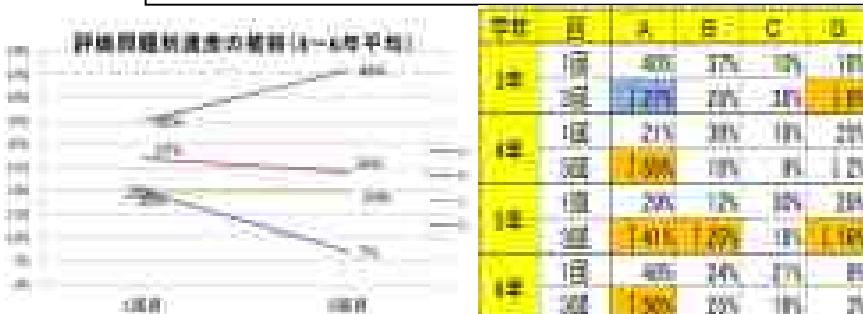
3. 調査研究の成果の把握・検証

① 県の学力調査を活用した評価問題の正答率

県の学力調査問題を活用し、本校で作成し実施した読む力をはかる評価問題の正答率（A 十分できている、B おおむねできているをあわせたもの）は資料1にあるとおり、1回目（9月はじめ実施）と3回目（12月終わり実施）で比べると、62%から70%と8ポイント上昇した。また、「C 誤答」も減少しているが、1回目が多かった「D 無答」の割合が20%から7%と大きく減少した。

学年別に見てもAの割合が上昇している学年が多く、それぞれの学年において授業改善の成果が見られたといえる。

資料1 評価問題到達度の推移と学年別の到達度



② 県学力調査の結果

本年度1年間の成果をより客観的に見るために、12月に実施した熊本県の学力調査の結果分析を行った。比較は同一集団の経年比較とし、県平均との差がどのように変化しているかを見た。県学力調査は3年生以上が実施のため、経年比較できる4年生以上の結果で分析した。

学年	領域	定着率(自校)	県との比較	昨年度県との比較	変化
6年	話すこと・聞くこと	61.8%	-11.3	-5.9	-5.4
	書くこと	81.3%	26.8	-1.9	28.7
	読むこと	56.5%	3.6	-8.7	12.3
	伝統的な言語文化と国語の特質	79.2%	-0.9	-3.1	4.0
5年	話すこと・聞くこと	75.6%	2.1	-3.5	5.6
	書くこと	54.4%	9.0	-1.0	10.0
	読むこと	62.9%	1.9	-13.3	15.2
	伝統的な言語文化と国語の特質	70.9%	-0.6	-4.4	3.8
4年	話すこと・聞くこと	59.5%	-6.5	-11.0	4.5
	書くこと	91.2%	1.4	-10.1	11.5
	読むこと	45.4%	2.7	-2.2	4.9
	伝統的な言語文化と国語の特質	68.1%	1.3	-3.3	4.6

資料2 県学力調査学年別県との比較

資料2の比較結果からも、全学年に大きな伸びが見られ、本年度研究内容を各学年で共通実践として取り組まれた成果が見られると考えている。特に、読むことに関しては、経年比較の変化を見ると、4年生が4.9ポイント、5年生が15.2ポイント、6年生が12.3ポイント伸びており、県平均と比べてもプラスに転じた。観点読みを基本とした読み取り法を多くの児童が習得し、活用できた結果であると捉えている。また、読むことに併せて書くことも高い伸びを見せており、授業のまとめや単元ゴールとして取り組んだ「自分の考えをまとめる」成果が見られており、全学級の共通した授業改善の結果と捉えている。

③ 習得の授業づくりに関する教師の自己評価

本年度、全職員習得手立てを明確にし、学び合いをとりいれた指導案を作成して公開授業を実施し、授業研究会も行うことができた。授業を行った教師は、写真13にあるように、実践のまとめを作成し、発問や手立て、教材がどうであったか自己評価を行い、次の授業作りに活かすことができた。

④毎日の家庭学習の実施率

9月はじめと2月末に、児童に対して質問紙調査を行った。現在2月末の結果を集計中であるが、速報値では毎日の家庭学習の実施率はほぼ100%である。ただし、学年の発達段階に応じた学習時間の目標の達成率はまだ低い状況にある。年度末までに詳細の分析を行いたい。

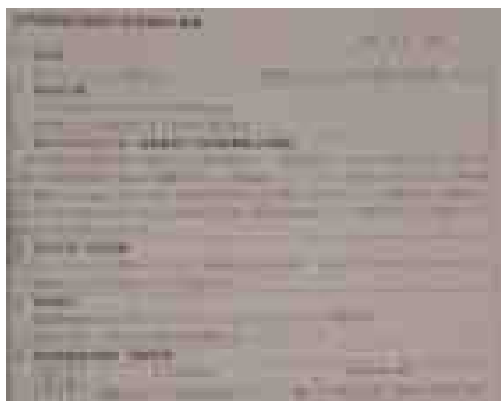


写真13 実践のまとめ。単元計画や言語活動等、単元ごとに実践をふりかえった。

4. 今後の課題

本年度は、学校総体として多くの取組を行うことができた。そのおかげでたくさんの成果が見られた。一方で、学校全体で進めてきたことにより、児童それぞれのニーズに合わせた取組が足りなかった部分も見られた。例えば、学力充実タイムでは、毎回学年一斉に同じプリントを実施した。学力に応じて質や量の変化をつけることで、より児童の学力に応じた学力充実タイムが行われ、効果が上がるのではないかと考えている。実際に、学力調査においても、「伝統的な言語文化と国語の特質」の数値は伸びたものの、まだ県平均を下回っている状況にある。次年度は漢字、語句等の基礎的な学習をさらに充実できるよう、朝の活動や放課後の個別指導の時間の活用について改善を図りたい。また、全体の読書量がまだまだ伸びていない。週に平均1,2冊という低い値である。学校で授業と関連付けてできることや図書司書との連携、さらには家庭との連携でできることを整理し、児童の読書環境を整えていかなければならない。

授業改善については、次年度以降も観点読みを土台とし、単元を貫く言語活動との関連を図りながら継続的に実践していかなければ本当の成果は見えてこない。今年度、授業中のノート指導、板書、発問等、習得の授業の質の向上に向けて、授業研究会等で多くの意見が出された。それらの課題を整理し、検証改善サイクルを継続して研究していく必要がある。

また、家庭との連携の面で、家庭学習充実のためには、家庭生活の時間の見直しが必要である。本校で行った質問紙調査において、高学年ほどテレビ視聴時間が多く、家庭学習の時間が目標時間に到達していない児童の割合が高くなる傾向も見られている。3月に、生活時間の見直しのため、全校で生活時間の計画をたててチェックする取組を試行的に行う予定である。家庭との連携のあり方をさらに探っていきたい。

最後に、学習規律等の学ぶ姿勢作りにおいては、学校全体で統一した取組ができていない。落ち着いた学習環境を学校全体で作成し、児童が過ごしやすい学びやすい学校にしていくことも学力の向上には非常に重要な要因である。本校の足元を見つめ直し、「誰かの百歩よりみんなの一步」を合言葉に、今後も職員が一丸となった地道な取組を続けていきたい。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成25年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	熊本県	番号	43
-------	-----	----	----

推進地区名	八代市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組の内容

1. 重点課題

- (1) 教科を貫く言語力である小学校国語における「話す・聞く能力」、「読む能力」に関する課題
- (2) 基礎的・基本的な知識及び技能を活用し、思考力・判断力・表現力を育成する授業づくりに対する教師の意識改革と授業力向上に関する課題
- (3) 主体的に学習に取り組むために必要な学習規律や仲間づくりなど、基盤となる学びの環境づくりに関する課題
- (4) 基礎的・基本的事項の定着と学習の習熟のための個に応じた指導、補充学習に対する学校の指導体制づくりに関する課題
- (5) 学力を確実に定着させるための効果的な家庭学習をはじめ、家庭での学ぶ環境づくりに関する課題

2. 重点課題への取組状況

これらの課題解決のため、次のような取組を行った。

- (1) 特に小学校国語科の授業において、自力解決、小集団解決、全体での練り上げという学習展開の下、言語活動を有効的に位置付けた思考力・判断力・表現力を高める授業スタイルの確立を行った。そのために、研究授業や校内研修における授業研究会等に指導主事が参加し、指導助言を行った。
また、本市の課題である「読む能力」の向上を支援するため、各教科等において読書につながる指導や授業展開の推進を行った。そして、各校に配置した学校図書館指導員を有効活用しながら、図書館を整備するとともに読書を推進した。
- (2) 「学力向上やつしろプラン」の視点から、徹底指導と能動型学習のめりはりをつけた授業展開である熊本型授業の推進を行い、学校訪問や校内研修推進事業等において指導助言を行った。そして、教師の意識改革と授業力向上を進めた。また、学力向上ハンドブック（八代市教育サポートセンター作成）の活用による教師の授業力の向上を目指した。
- (3) 「話し方・聴き方」、「声の大きさ」、「姿勢」等、各校における学習規律の整備を進めた。また、小中一貫・連携教育をさらに推進し、確かな学力、豊かな心、健やかな体の育成を図るために、

小中連携コーディネーター研修会等の開催、各中学校区の取組の様々な場での情報提供等を行った。そして、基本的な生活習慣とあわせて学習規律についても小中で連携をとり、系統的に指導をすることができるような体制を各校区で整えるよう促した。

- (4) 算数科での少人数指導やTT指導において、効果的な授業展開や指導方法について研究を進め、個に応じた指導の在り方を追求した。また、学力の定着を図るための補充学習を計画的に行うなど学力を定着させる時間の確保を行った。
- (5) 小中一貫・連携教育において、各校区で「家庭学習のてびき」や「生活のきまり」等を作成し、家庭学習の意識を高め家庭学習を充実させた。また、家庭の教育力を高め、家庭学習についての意識を高めるため「教育講演会」等の情報提供を行った。

以上のことについて、郡築小学校において研究を行い、その成果を研究発表会を開催し授業公開を行うとともに研究の概要と成果等を発表し、その取組について評価を得ることとした。

3. 調査研究の成果の把握・検証

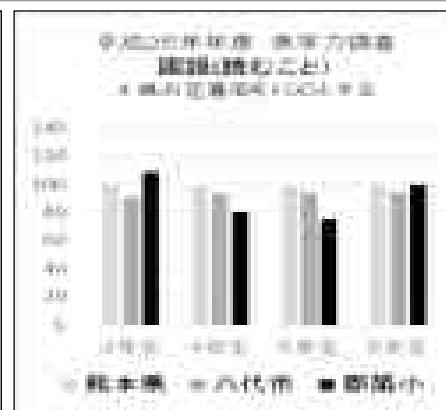
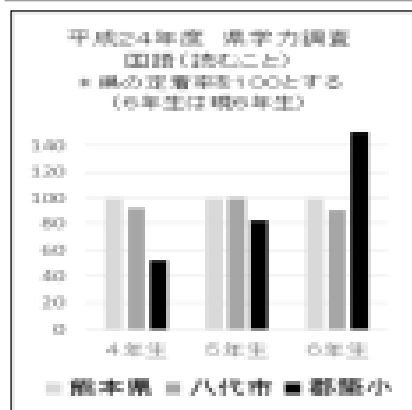
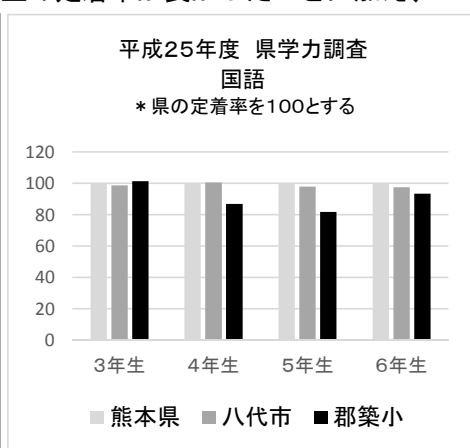
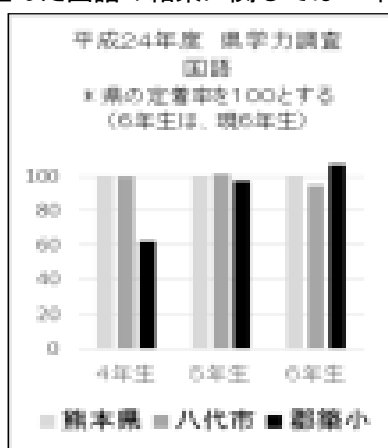
- (1) 熊本県学力調査及び全国学習状況調査において、八代市と郡築小学校の学力の経年比較等を行い、取組内容の推進状況と学力の変容の関係について分析した。

特に重点的に取り組んだ国語の結果に関しては3年生の定着率が良かったことに加え、4年生に

おいて伸びが認められたが、他の学年においては、定着率としての成果は表れなかった。

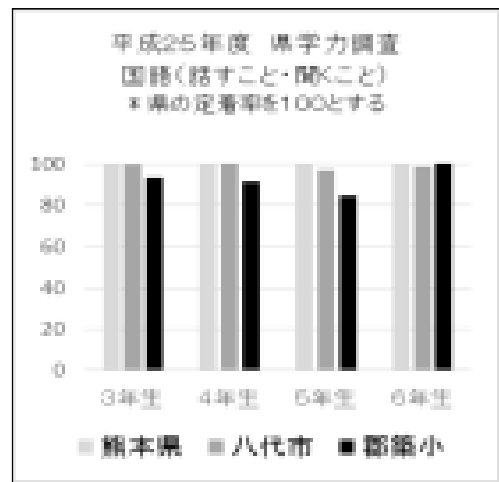
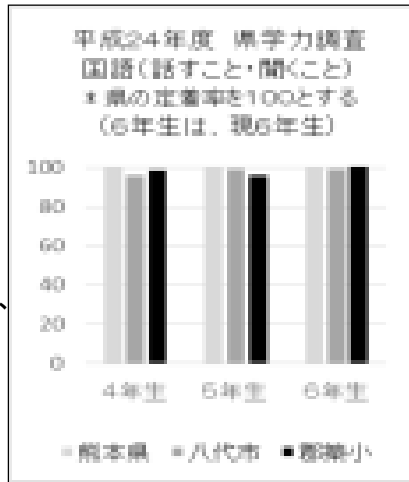
しかし、児童の授業に臨む様子や県学力調査質問紙調査において、6年生のすべてが勉強は大切であると感じていることから、学習意欲の向上が表れており、今後の学力の定着及び向上が期待できる。

八代市の課題でもある「読むこと」に関しては、県学力調査の結果からでは、あまり学力の伸びを感じることはできなかった。また、同様に「話すこと・聞く



こと」に関して、八代市の結果、郡築小の結果ともに向上は見られなかった。

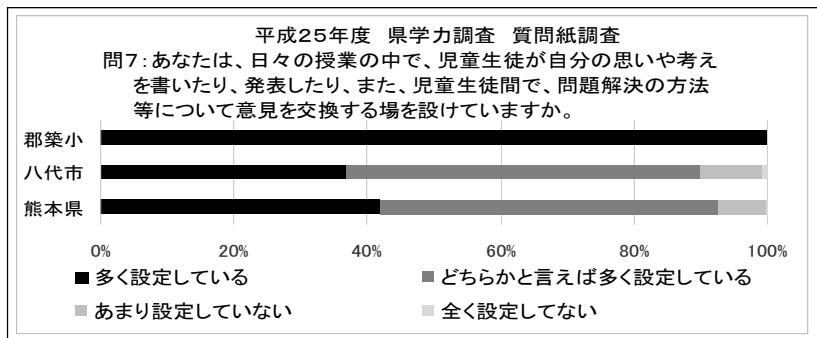
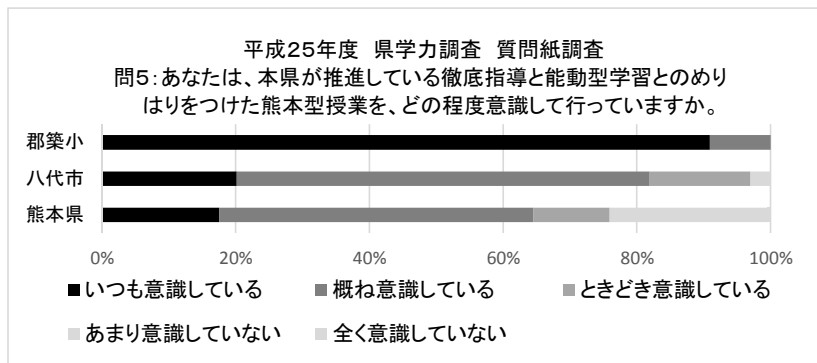
しかし、研究発表会参加者における公開授業の感想の中に、「児童生徒の生き生きと学ぶ姿、発表する姿がすばらしかった。」、「相手意識



を持つこと、よい聞き手を育てることの大切さを感じた。」というものが多数あった。これまでの取組で児童の学ぶ姿勢が身につけてきている。今後取組を継続させていくことが重要である。

(2) 県学力調査の教師対象の質問紙調査の結果からも、郡築小学校の教師集団が、熊本型授業を強く意識して授業を行ったことが分かる。

また、研究発表会の参観者によるアンケートにおいても、「『学び合い』『伝え合い』『高め合う』あり方・姿勢を学んだ。」、「グループの話し合いによって、一人一人の考えが深まったり、分からなかった子どもが分かるようになったりすることが大切だと思った。」等の感想があった。



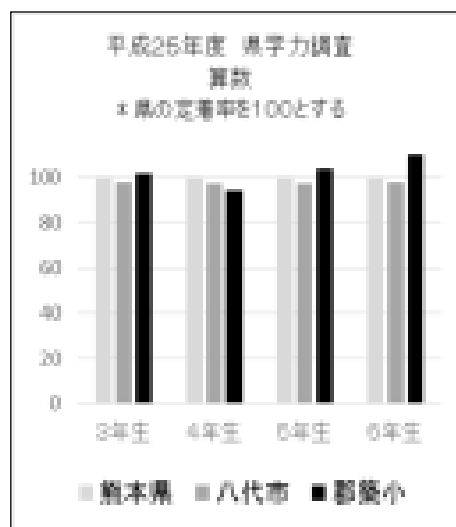
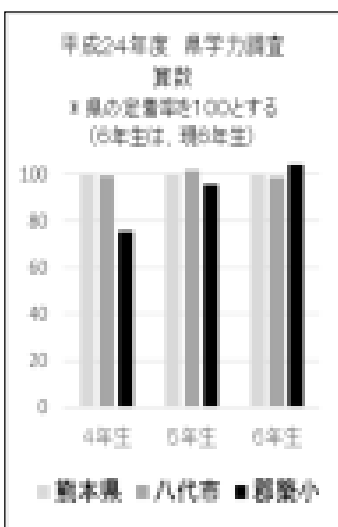
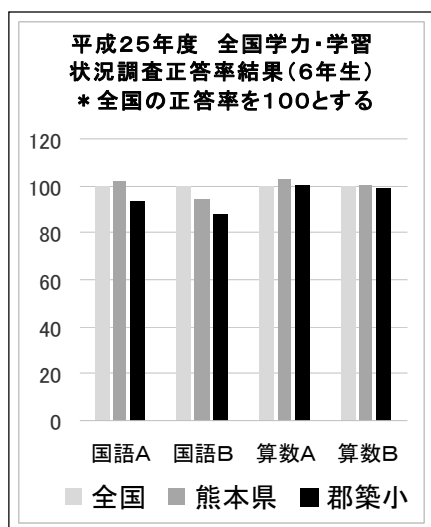
さらに、「全校あげて共通理解を図り、連携していることが伝わった。連携力がすばらしい。」という感想が多数あった。教師集団の意識改革と授業力向上が図られていると評価できる。

(3) 学習規律の確実な習得については、学力の定着のために全職員共通理解のもと取り組む姿勢が見られた。児童の学習訓練もよくなされており、言語活動も課題達成のため効果的に取り入れることができるようになった。特に研究発表会や研究授業等においても、「学習訓練がよくなされていて、授業を見て、すがすがしい気持ちになった。」「とても落ち着いていて、学習訓練がなされている。『小学生らしさ』『素直さ』がいい。」等の参観者の感想が多かったことからそのことが分かる。また、この学習規律を身につけさせる取組は、校区の中学校と連携されており、今後中学校に進学した後の学習にも良い影響を与えると思われる。

(4) 熊本県学力調査や全国学力・学習状況調査の結果から、算数科における学力の定着及び向上がみられた。これは、郡築小で取り組まれた習熟度別の少人数指導や補充指導の成果といえる。少人数

指導における個に応じた指導や習熟度に合わせた課題の設定、加えて日課の見直しによる朝と放課後の補充学習の時間の確保や長期休業中の補充学習等が効果的であることを示している。

郡築小の行った少人数指導や補充学習の取組は、今後八代市における学力の定着及び向上のための取組の参考となるものである。

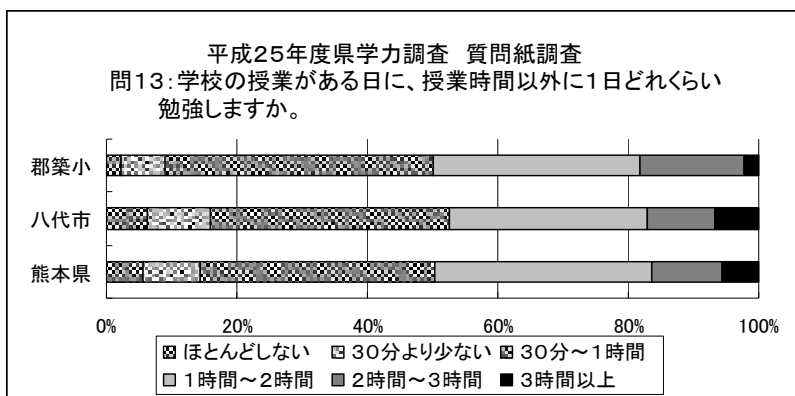


(5) 保護者への啓発や家庭や中学校との連携により、家庭学習への関心が高まり、勉強は大切なものであるという意識が高まるとともに、家庭学習の時間も多くなっている。

家庭学習を充実させるためには、保護者へのはたらきかけが大切であることがわかる。

また、郡築小と校区の第七中で作成した9年間を見通した家庭学習や学習規律等の手引きも効果的であったと考えている。

保護者への啓発や学習面での小中連携を市全体でも力を入れていく必要がある。



4. 今後の課題

- (1) 学力の定着については、まだ十分な成果が上がっているとは言えない。特に国語科の「読むこと」における課題が残る。読書や読書につながる教科の指導を今後も継続発展させていく必要がある。各学校において、図書館の環境整備に力を入れたり、朝の読書を推進したりする等全市的に読書に力を入れる必要がある。
- (2) 国語科において、県学力調査や全国学力・学習状況調査における達成率としての成果が現れていないことから、教職員における指導法の工夫を含めた授業改善がさらに求められる。各学校において、学校総体で授業改善を行い熊本型授業を推進していくよう、学校訪問や校内研修推進事業等において指導・助言を行っていくとともに、教師の意識改革を進める。また、「学力向上ハンドブック」の各学校における活用を継続させる。
- (3) 少人数指導について実施可能な学校については、郡築小の実践を情報として提供するとともに、指導助言を行う。また、補充学習については郡築小の取組を参考に各学校において実態に応じて取

り組むよう指導・助言を行う。

- (4) 小中一貫・連携教育をさらに推進し、学習面で9年間を見通した学習訓練、家庭学習のあり方について連携を密にするよう指導を行う。また、各中学校区の取組等について情報提供を行いお互いのよい面を取り入れることができるような環境整備を行う。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成25年度委託事業完了報告書
【推進校】

都道府県名	熊本	番号	43
-------	----	----	----

推進校名	熊本県八代市立郡築小学校
------	--------------

○ 推進校として実施した研究内容

1. 重点課題

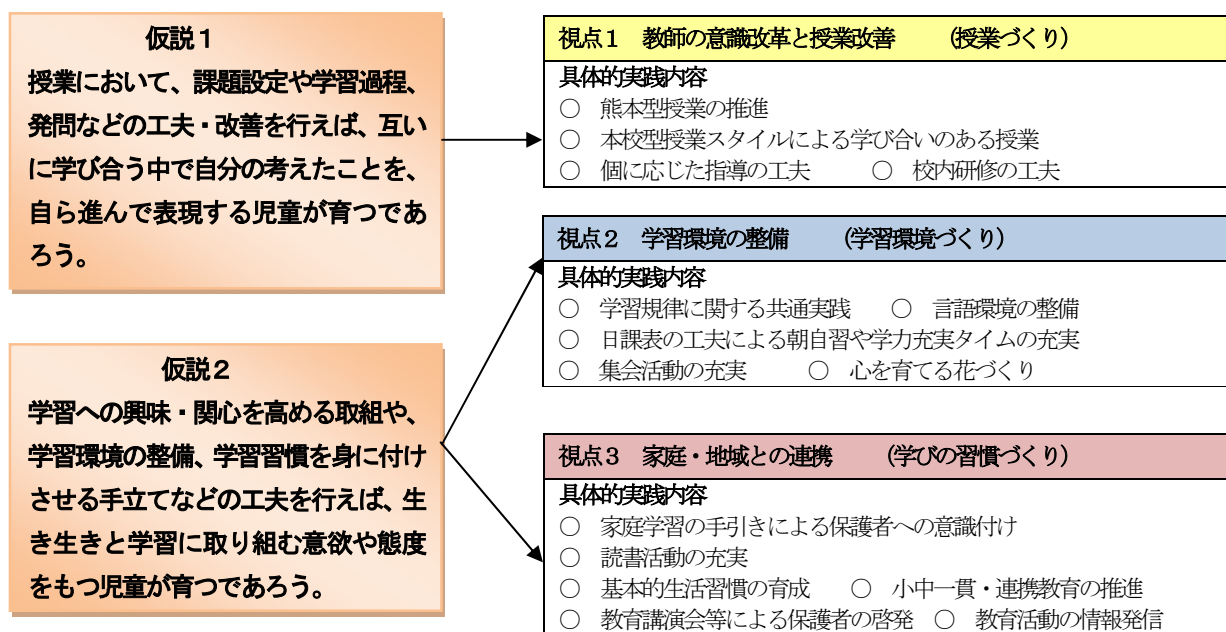
- 児童が見通しと意欲をもって授業に参加し、その中で自分なりの考えをもち、友だちと学び合うことができるように熊本型授業の推進と授業改善に取り組み、「学力向上やつしろプラン」をもとに、「郡築スタイル」の学びを作成し、発信する。そのために校内研修の充実を図り、職員の意識改革と授業力向上を目指す。
- 学校総体で取り組む学習規律としての学習準備物や授業のきまり、話型などを、児童の発達段階や実態に応じて、見直し、改善する。また、それらを数値化し徹底することで児童に定着させる。また、掲示物や読書活動などの言語環境の整備を進め、児童が生き生きと学習に取り組むための学びの環境づくりを行う。
- 基礎的・基本的事項の定着と学習の習熟をめざして、朝の学習タイムと学力向上タイムを活用するための時間確保と内容についての工夫を行う。また、個に応じた指導として、算数の習熟度別少人数指導の充実や放課後及び長期休業中の学習会の計画と実施が必要である。
- 家庭の教育力の向上のため、保護者等を対象に「教育講演会」やアンケートなどを実施し、児童の学習習慣についての啓発を進める。また、家庭学習の習慣化と基礎的・基本的事項の確実な定着をねらい、「家庭学習の手引き」をスモールステップで提案し、内容の充実を図っていく。学びを確かにするために必要な家庭学習の在り方を児童や家庭に提案し、中学校区においても、段階的に家庭と連携して進めていく。

2. 重点課題への取組状況

(1) 研究主題

生き生きと学習に取り組み、自らの考えを表現できる児童の育成

(2) 研究の仮説と取組の視点



- 3つの視点に対応した専門部会の活動を中心に研究を行った。

(3) 研究の実際

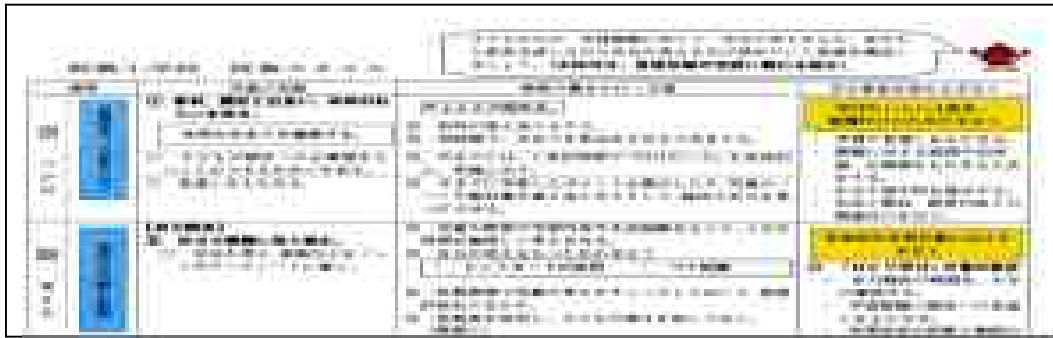
ア 授業づくりの取組 (視点1)

(ア) 授業改善への取組

平成24年度から、児童の発達段階や実態を考慮しながら、学校総体で授業改善に取り組むために、熊本型授業の推進と教師用のマニュアルを作成し実践を行っている。

a 授業スタイルの活用

児童が、学習意欲をもち、自分の考えをもち、表現する力を育成するための学習過程の工夫として、熊本型授業を基盤とした教師用の本校型授業スタイルを作成した。この授業スタイルを用いて、児童相互の学び合いを通して自分の考えや思いを表現し合ったり、ペアやグループ学習を通して協力して課題を解決したりする場を十分に設定するなどの授業づくりを行っている。



b 手引きの作成と活用

授業スタイルをスムーズに実践するための共通実践事項を教科別の手引きとしてまとめ、日々の授業の中で活用している。本校の授業スタイルを推進する上で必要な「発問」「机間指導」「ノート指導」「板書」「学び合い」の項目について作成した。ノートや板書は、本校の授業スタイルに沿った形とした。

また、授業スタイルを用いた授業の流れを、児童に意識付けさせるための掲示物を作成し、教室に掲示している。その他では、学び合いの中でグループ活動がスムーズにできるようにするための、児童用の話し合いの手引きを使うことで、互いの意見を尊重しながら、自分の学びを深め、広げることを目指している。



c 少人数指導による個に応じた指導

本校では、算数科において学級担任と少人数担当による授業を実施している。児童一人一人の進度や課題に応じた指導を目指し、今年度は3年生以上で習熟度別の少人数指導を実施しているが、児童の理解の状況に応じて、コースごとに課題や発問・教具などの工夫を行っている。このコースは、プレテストの結果などを生かして児童が選んでいる。また、単元の途中で、児童の希望によりコースを変えることもある。

d 授業改善を目指した校内研修の取組

本校では次のことに取り組み、校内研修を中心に職員の意識改革と授業力向上を目指した。

- 全員授業の取組 (平成25年度は1学期と2学期に1回ずつ実施)
- KJ法を用いたワークショップ型授業研究会の実施
- 研究授業を通しての指導案形式の研究
- 研究授業前の全体事前研に向けた「授業づくり部」での事前研究
- 職員を児童役にした模擬授業での事前研究会
- 講師を招聘しての講話 (学級づくり・学級経営について)
- 授業チェックシートを用いた授業の相互評価
- 管理職による授業参観と指導 (随時)
- 校内研修への指導主事等の指導訪問 (熊本県教育庁義務教育課、熊本県八代教育事務所、八代市教育委員会学校教育課、八代市教育サポートセンター)
- 熊本県教育委員会認定「授業マイスター」を招聘しての模擬授業
- 学級集団の傾向を把握するためのアンケート (Q-U) の結果説明会の実施
- 他校の研究発表会への参加と復講
- 県学力調査 (ゆうチャレンジ) 問題の作成演習



○ リアルタイム評価支援システムを用いた職員アンケートによる意識調査（各学期末）

本校では、校内研修をPDCAサイクルで計画的に行い、年間・学期・月ごと、そして研究授業のたびに研究への取組の評価・改善を行っている。研究授業を各専門部からの提案と重点的実践事項の実践・評価の機会とし、また授業力の向上の場としている。研究授業の前は必ず事前研を実施し、指導案の形式・評価・授業の展開について、研究の視点に基づき職員で討議を行い、授業研究会を充実させている。研究授業では、授業づくりの視点を明確にするために、「授業チェックシート」を活用し、授業改善を目指している。授業研究会では成果・課題・改善策について視点を決め、全員の意見を交流するためにKJ法を活用することで、毎回活発な意見交換がなされている。また、校内研修への指導主事等の指導訪問や授業マイスターの模擬授業、学級づくりについての講話など外部の人材に学ぶ研修を行い、職員の意識改革の機会とした。

イ 授業づくりの取組（視点2）

（ア）学習環境の整備

授業のねらいを達成するためには学習環境の整備が大切である。そのためには、学校総体として教室内の環境や学習のきまりごとについても共通理解、共通実践を図る必要がある。

a 教室の掲示

児童が発表する際の話型「チャレンジ発表名人」や、教室で適切な声の音量のめやすとしての「声のものさし」、話すとき聞く時の心構えを示した「聞き方・話し方」、椅子に座るときの姿勢の見本「ぐう、ぺた、ぴん、とん」を作成し、教室前面に位置を決めて全教室に掲示し活用している。

b 学習のきまりごとシート「おきまりくん」

学習をスムーズに進めるためのきまりごとが児童に一目で分かるように、A4サイズのシートを児童全員分作成し、「おきまりくん」とネーミングして児童にとって身近に感じられるものにした。内容についても職員が共通理解したことを載せており、日常的な指導を行う上でも効果的なものとなった。

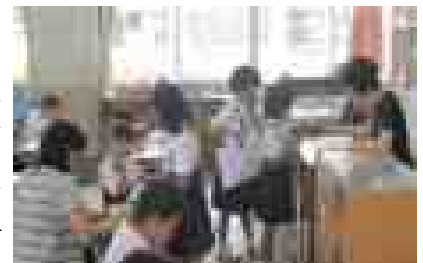


c 言語環境の整備

児童が学校生活において豊かな言語感覚を育むために、校内の掲示物の工夫や校内放送の活用を行っている。階段の踊り場や正門の掲示板には、月ごとに委員会の児童が作成した季節の作品や短歌、俳句、百人一首などが掲示されている。また、階段の段差を利用し児童の知的好奇心を高めるような掲示の工夫を行った。校内放送においても、音楽を通して豊かな情操を育む環境づくりを行っている。

（イ）定着の時間の工夫

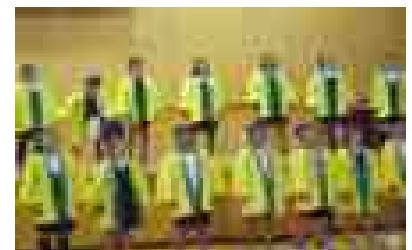
学力の定着を図るためには、学校総体として取り組む時間の確保と、児童に個別に対応する時間の確保が必要となる。そこで、日課の見直しを行い、「朝の学習タイム」と「学力充実タイム」を設けた。「学力充実タイム」の時間には、国語・算数の活用力向上を図るため、「ゆうチャレンジ」の過去問題や単元別評価問題に取り組んだ。また、個別指導が必要な児童を対象とした放課後の「個別指導タイム」の設定や夏休みの学習会を行った。



これら時間確保の工夫を行った上で、全職員が協力して指導に当たっている。

（ウ）集会活動の充実

本校の児童の学習面での課題の一つとして、自分の考えや思いを伝えること、人前で発表することに苦手意識をもっていることがあげられる。その解決



策として集会活動の充実に努めている。月1回の音読集会では、学年ごとに工夫して構成した詩や早口言葉などの音読発表をしている。発表する児童は体育館に響く大きくはっきりした声を出すことで、伝え合い表現し合う気持ちよさを味わい、聞いている児童も音読や群読の楽しさを共感して、ともに言語活動を楽しんでいる。発表した後は、聞いている児童と発表した児童、それに教師からの感想発表を行っている。回を重ねるごとに進んで感想発表をする児童が増え、聞く態度も向上している。

ウ 学びの習慣づくりの取組 (視点3)

(ア) 家庭学習の手引き

主体的に学ぶ意欲・態度を育成するには学年に応じた家庭学習の内容を示す必要があると考え、「家庭学習の手引き」を作成し、全児童と保護者に配付した。児童へは、低・中・高学年ごとの学習時間や学習方法、学習内容について具体的な目安を示した。児童と家庭に家庭学習のやり方を示し、家庭の協力を得ながら日々の実践化を目指しての取組である。



(イ) はッピー貯金

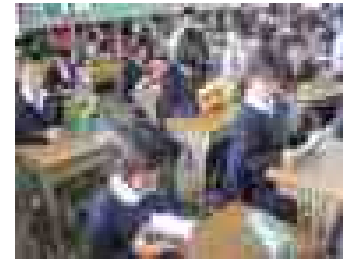
学力の充実には、基本的な生活習慣の確立が欠かせない。本校は以前から、健康への関心・意欲を高めるとともに、基本的な生活習慣の定着を目指して、「はッピー貯金」に取り組んでいる。「起きる時刻・学習を始める時刻・寝る時刻」を決めて、生活リズムを整える三点固定運動を点数化したものである。本年度は児童自身が項目ごとのめあてを決めて実践するように様式を見直した。また、家庭からは「子どもへの励ましの言葉」を書いていただくようにした。

(ウ) 読書活動の充実

児童がたくさんの本に出会うように、二つの視点から読書活動を推進してきた。

a 時間設定の工夫

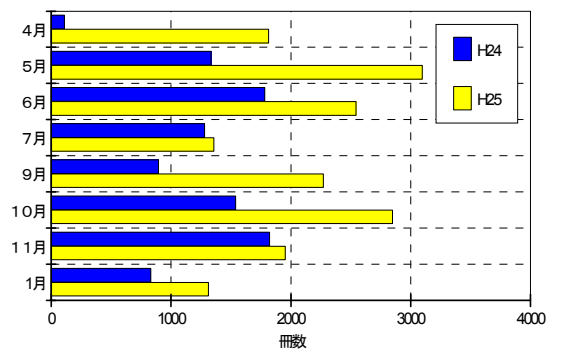
朝自習の時間内に、毎日読書をする時間(さわやか読書タイム)を確保した。この時間を全学級で同じように進めるために、職員で「朝会の日以外は担任も一緒に読書をする」などの共通理解を図った。



b 読書意欲を高める工夫

児童の「本を読みたい」という意欲を高めるため図書館指導員と協力しながら図書館の環境整備に努めた。また、月1回の保護者や地域の方による読み聞かせや、児童の読書の幅を広げるための必読書カードの活用などを行っている。更に、国語の並行読書や調べ学習で使う本などをそろえ、常に児童の周囲にたくさんの本を置くように配慮している。このような取組の結果、図書館の本の貸し出し数が増え、読書に親しむ雰囲気为学校全体で育っている。

【郡築小学校図書館 月別貸出数】

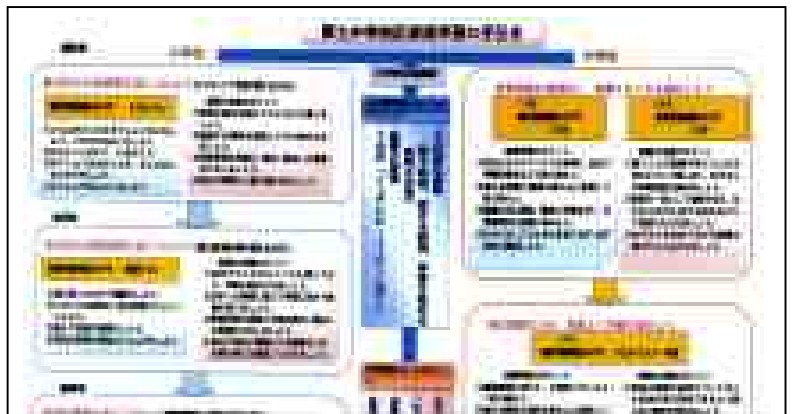


(エ) 教育講演会の実施

子育てや家庭教育に関して保護者との共通理解を図り、家庭教育力を高める目的で、教育講演会を実施した。平成25年度は中九州短期大学准教授の永野典詞先生から、「子どもとの関わり方〜ほめる、叱る、やる気を引き出す3つの視点から〜」の演題で児童との関わり方についてお話をうかがった。多くの保護者が参加し「親の至らないところを直して、基本的なことを毎日続けていこうと思った。」などの感想があった。

(オ) 小中一貫・連携教育への取組

第七中学校区には、本校と昭和小学校の2つの小学校があり、平成25・26年度の2年間、小中一貫・連携教育推進モデル校として義務教育9年間を見通した児童生徒の育成を目指し、取組を進めている。中学の教師が小学校に出向き6年生対象に出前授業を行ったり、3校で相互に研究授業



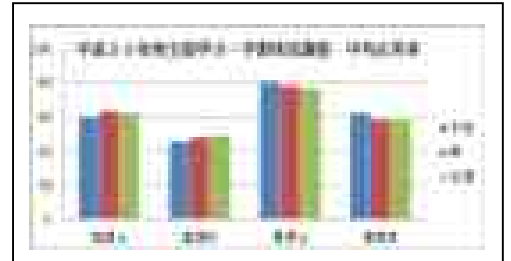
の参観を行ったりすることで、児童・生徒の様子や発達段階についての共通理解を図っている。また、夏期休業中に、3校の全職員による合同研修会も行っている。

平成25年度は、第七中学校区で9年間を見通し発達段階を考慮した家庭学習や基本的生活習慣の育成、学習規範などについての手引きを作成し、小学校から中学校への円滑な移行と系統的な指導を目指している。

3. 調査研究の成果の把握・検証

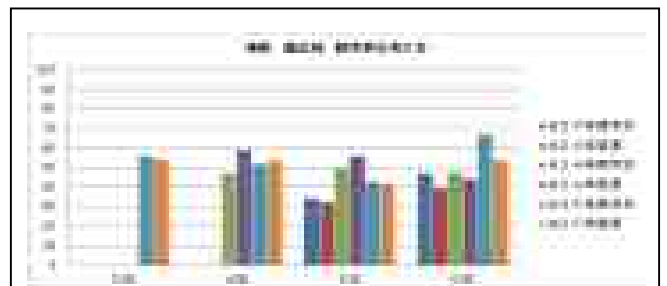
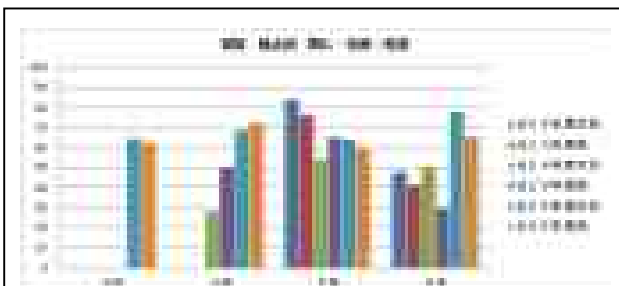
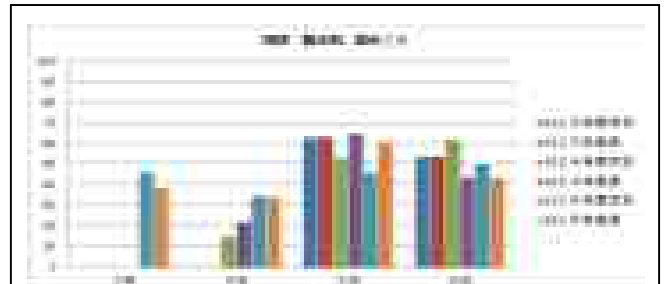
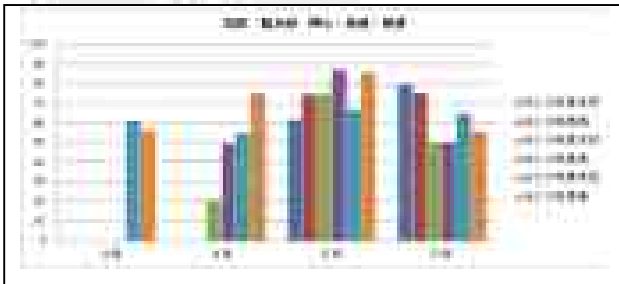
(1) 全国学力・学習状況調査の結果から

○ 算数は、A・Bともに県・全国平均を超えた。これは、算数の少人数習熟度別指導や学力充実の時間などの個に応じた指導と授業改善の成果である。また、質問紙では、「算数の勉強が好きですか。」の設問に対して肯定的な児童の割合は93%と高かった。これは、算数の授業の中でヒントカードやペア活動などの手立てにより自分の考えをもち、友だちとの意見交流を通して「分かった」「できた」という喜びを感じる機会が増えたことで学習意欲が高まったためと考える。授業の中で毎時間実施している自己評価でも、算数は全学年高い評価である。



● 国語はA・Bともに、県・全国平均をやや下回った。今後本校で取り組んでいる授業づくりを生かしながら、発問の精選や読み取ったことを根拠に自分の意見を書いたりするなどの表現する場を設定する取組を深めていく。また、今年度から実施している毎日の朝読書などの読書活動や音読などの日常活動を一層推進する必要がある。

(2) 熊本県学力調査の結果から



○ 3年間の結果を見ると、国語、算数ともに県平均を超える観点が増えている。特に、以前から本校の課題であった国語の「読むこと」においては、今年度は3学年が県平均を超えることができた。読書活動や課題、発問をはじめとする授業改善に取り組んだ成果だと考えられる。

○ 算数では、ほとんどの観点で3学年が県平均を超える結果であった。これは、前述の全国学力・学習状況調査と同様に本校で取り組んでいる個に応じた指導などの成果であると考えられる。

● どの観点についても学年差や個人差がみられるという本校の課題解決にはまだ取組が不足している。また算数に比べて国語の伸びが小さい。これらの課題を解決するために、授業改善を含め本年度の取組の見直しを取り入れていく必要がある。

(3) 児童アンケートの結果から

児童の実態や取組の成果と課題を把握するために、平成24年度から、7月と2月に「全国学力・学習状況調査児童質問紙」をもとに作成した児童アンケートを実施している。



- 「授業で自分の意見を発表する機会がある」は、大きく伸びている。1時間の授業の中に自分の考えを伝える場や、学び合いを取り入れた授業の流れが児童に浸透してきたことが分かる。学校総体で「授業スタイル」と「授業の手引き教師用」の活用に取り組んだ成果である。
- 互いの意見を出し合う活動の楽しさを感じている児童の割合が増えてきた。「理由をつけて発表できる」は、平成24年度よりも伸び、7割を超えている。教師用のマニュアルや児童が発表する際の話型、自分の考えをそれぞれの児童がもつための手立ての効果と考えられる。
- 授業中の姿勢がよくなり、学習に集中する雰囲気が増えてきた。どのクラスでも学習のきまりが徹底されている。
- 家庭学習は、家庭と共通理解しながら進めることで定着してきた。職員が共通理解をし、学校総体で取り組むことが成果につながった。

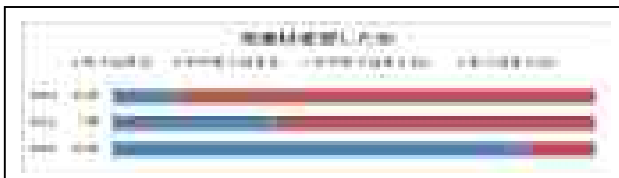
(4) 保護者アンケートの結果から

児童アンケートを参考した項目で作成した保護者アンケートを昨年度から7月と2月に実施している。



- 「学習や発表への意欲」（姿勢などの学習ルール）「家庭学習の習慣」「家庭学習の環境づくり」では、伸びがられた。学校での取組が家庭に少しずつ浸透し、学校の取組に対して関心をもつ保護者が増えてきたことがわかる。
- 「早寝早起きの習慣が身に付いている」「決まった時刻に学習を始めている」などの基本的な生活習慣の定着は、あまり変化がなかった。小中一貫・連携教育の取組と合わせて、今後の保護者との相互理解と協力体制の強化が必要である。

(5) 職員アンケートの結果から（評価と記述）



- 皆の前で自信をもって発表する児童が増え、児童の方からも自分の考えを発表するのは楽しいという声も出ている。
- 学習規律・学習訓練の徹底が児童の変容に大きくつながった。発達段階に応じた指導であり、継続しないととに戻ってしまう。児童の学び合いの姿をさらに高めていく必要がある。
- 2年前に比べると学力充実に向けた職員の意識の高まりはとても大きい。その高まりが個人ではなく学校総体として、また組織体として動けるようになった点に変容が見られる。

4. 今後の課題

- ・ 国語の力が課題である。今年度の反省をもとに授業改善を行い、更に読書や学力充実の時間などの内容を精選して取り組む必要がある。また、基礎的・基本的な力を確実に身に付けるための家庭学習の手引きや朝自習の時間の計画の見直しや改善も必要である。学力の個人差を解消するための、個に応じた手立ての工夫にも取り組まなくてはならない。
- ・ 授業スタイルの実践は効果的だった。教師の力量を高めることが児童の学力向上につながるという共通認識を再確認し、次年度も、研究授業の機会を多く設定し、互いの授業を参観し合うことで、授業力を磨きスキルアップすることを目指す。
- ・ 次年度は、家庭学習の手引きや基本的な生活習慣の育成、学習規範などについて、七中校区小中連携推進会議で協議を深めることで、さらにステップアップした9年間を見通した学力向上の手立てに取り組んでいきたい。